

〈特集〉歴史の検証・復初精神

# 白鳥事件と中国 ―川口孝夫の「遺書」―

今西

一 ●小樽商科大学名誉教授

はじめに

近年、白鳥事件をはじめとする一九五〇年代の社会運動研究のタブーが解かれ、画期的に研究が進展してきている。それは、ソ連や東欧の社会主義国の崩壊、アメリカの日本占領文書の公開など、海外からの刺激が大きい。ところが中国や北朝鮮・韓国・日本などアジア諸国での文書公開は、残念ながら停滞している。とりわけ社会運動関係のものは、日本では公安警察の資料さえもとくに公開されていないのである。

私の恩師であり、日本現代史研究のレジェンドでもある松尾尊允は、「敗戦直後の京都民主戦線」(『戦後日本への出発』岩波書店、二〇〇二年)などで、あれほど見事に戦後の社会運動についての実証的研究を進めながら、戦後の日本共産党史については、本格的な研究を回避した。そうした壁を、近年の若手研究者は、軽々と乗り越えている。例えば松尾と同じ戦後京都の民主戦線を分析した福家崇洋は、米国国立公文書館(NARA)やフーヴァー研究所の文書を使って、共産党の動きを活写している(『京都民主戦線についての一試論』『人文研究』一〇四号、二

〇一三年)。

新しい研究の代表の一つは、松村史紀の「強制と自主独立の間」一(三(『宇都宮大学国際学部研究論集』第四七〇四九号、二〇一九・二〇二〇年)である。日本共産党の五〇年分裂、北京機関の問題を、日本、中国、ロシア、アメリカの資料を自由に駆使して論じている。このような研究が登場してきたのは、語学の天才ともいえるべき和田春樹の『歴史としての野坂参三』(平凡社、一九九六年)や、旧ソ連のモロトフ文書に依拠した下斗米伸夫の『日本冷戦史』(岩波書店、二〇一一年)などでの「冷戦史」の提唱が大きな前提となつている。現代史は、確実に一国史を乗り越えてきている。

五〇年代の文化運動についても、文学者の鳥羽耕史(『一九五〇年代―記録の時代』河出書房新社、二〇一〇年)や早世した社会学者道場親信(『下丸子文化集団とその時代』みすず書房、二〇一六年)などによって、地域サークルの問題が発掘されている。歴史学でも、網野善彦の国民的歴史学運動からの離脱を、小河内の山村工作隊の挫折から説いた内田力

のユニークな研究も現れている（「一九五〇年代の網野善彦についての政治と歴史」『日本研究』五八巻、二〇一八年）。

今日、「五〇年問題」は、確実に歴史問題として扱われるようになり、学術研究の対象となってきた。私もまた、オーラル・ヒストリーを使い、五〇年代京都の学生運動や白鳥事件についての探求を続けてきた。白鳥事件と言っても、若い人には馴染みがないかもしれないが、一九五二年一月二日、北海道警の白鳥一雄警部が北大の学生を中心とする共産党の中核自衛隊によって、札幌市内で暗殺された事件である。実行者は佐藤博というポンプ職人だが、共産党札幌地区委員会の委員長村上国治が逮捕され、懲役二〇年の判決を言い渡される（一九六九年に仮出獄）。村上は無罪を主張し、五六年から六〇年代にかけて国民救援会などが村上は冤罪として白鳥事件の対策運動が展開される。

今でも北海道の一部では、村上は無実だと信じている人たちがおり、白鳥事件に触れることもタブー視されている。しかし、二〇一二年には、白鳥事件六〇周年として、後藤篤志らによって、HBCラジオ・ドキュメント「インターが聞こえない」白鳥事件六〇年目の真実」が制作され、翌一二年には東京と札幌で、講演会がもたれた。その成果の一部は、渡部富哉『偽りの冤罪』（同時代社、二〇一二年）、後藤篤志『亡命者 白鳥警部射殺事件の闇』（筑摩書房、二〇一三年）、大石進『私記 白鳥事件』（日本評論社、二〇一四年）として公刊されている。私も、いくつかのインタビューとともに、白鳥事件最後の証人高安知彦の手記を、「テロルの「兇弾」として中部大学総合雑誌『アリーナ』第二二号、二〇一八年）に発表している。

ここに公表する川口孝夫の『遺稿 いまなぜ「白鳥事件」の真相を公表するか』は、高安の手記とともに、白鳥事件の五〇周年を記念して、

二〇〇二年に五月書房から刊行される予定であった。しかし、川口がこの遺稿を書き上げたのは、周囲の話では〇三年の二月頃であり、翌〇四年の十一月一日に、川口は逝去している（享年八三歳）。川口は、白鳥の暗殺には直接参加していないが、札幌共産党の軍事委員会の重要なメンバーであり、村上の命令で、白鳥事件の実行犯の逃亡を助け、白鳥事件の真相をもっともよく知った人物である。彼は白鳥事件の真相を知りすぎたために、北京機関に流され、一九五六年から一八年間の中国生活之余儀なくされる。そのなかでの五七年の「反右派闘争」にはじまり、「大躍進」「人民公社」「四清運動」、そして「文化大革命」を経験し、中国社会主義の実態を見てきた人物である。

川口は、既に『流されて蜀の国へ』（一九九八年）という本を自費出版しているが、現代史家の田中真人が指摘しているように、同書では「白鳥事件の真相については曖昧にしている」（『民主主義・平和主義・社会主義』『史林』八九巻一号、二〇〇六年、一五五頁）。そのことは川口自身も気になっていて、この遺稿を残したのであろう。川口が白鳥事件について口を濁したのは、川口の一族は共産党一家であり、兄弟は共産党の地方議員であった。彼は共産党を除名されただけで「反党盲従分子」として、川口家の墓への納骨も許されなかったそうである。また後述するように、『流されて蜀の国へ』を刊行しただけで、ともに中国へ亡命した同志からも、共産党の秘密を外部にもらした「裏切り者」として糾弾されている。それにしても白鳥事件では、一〇名の人物が、北京機関への亡命を命ぜられており、興味深い問題である。

なお本稿の作成には、早世した斎藤孝をはじめ一〇名以上の人びとからのインタビューを使っているが、今日でも北海道では白鳥事件はタブー視されており、迷惑のかかるのを恐れて、いっいち名前を明記しな

いことにする。

## 一 川口孝夫の生い立ち

川口孝夫は、彼が翻訳した『中国現代少数民族文学選』（未来社、一九八九年）の奥付によると、一九二二年、北海道上川郡士別村二七線（現在の士別市）の農家に生まれている。彼は「幼いときからアイヌ民族との触れあいがあり、毎年、春と秋には、天塩岳に猟にくるアイヌ民族の一家が、荷物と銃を背に犬をなん匹もつれて私の家に寄つてくれた」と語っている。その後、戦後に共産党の活動をするようになってから、「名寄と知恵文のあいだのなん戸かあるコタンや旭川の近文コタンなどで、北海道の開拓史を調べているうちに」、開拓史とは「シャモがアイヌ民族の生活圏に押し入り、土地を奪い、生活を破壊し、支配を強めていった歴史であることを」知らされた。また日本を去る一年前に、「十勝の幕別でコタンのひとびと知り合」い、その人たちから「子供のときから日常の生活のなかで、学校で、さらに軍隊で受けた差別の実態を聞いた」。その体験があつて、中国に亡命してからも、「多民族国家の中国ではどのような民族政策が執行され、少数民族の解放はいかにして実現したかに深い関心があつた」。そこで彼は長期間滞在した四川省で、チベット族の自治区などを探訪している。その高原の草地では、壮大なラマ寺



いまにし はじめ◎一九四八年、京都生まれ。龍谷大学文学部を経て七九年、立命館大学大学院文学研究科修士課程修了。九〇年、京都大学より農学博士。九二年から小樽商科大学助教授、九五年から教授・特任教授を務め、二〇一四年に退職。現在、立命館大学人文科学研究所研究員。著作は、『近代日本成立期の民衆運動』（柏書房、一九九一年）、『文明開化と差別』（吉川弘文館、二〇〇一年）、『遊女の社会史』（有志舎、二〇〇七年）など多数。

院や元農奴主の大邸宅、「解放前の農奴制の残酷な支配の構図」を見せられる。彼が訪れた時には、「奴隷、農奴だったひとびとは」「解放された喜びと明るさと、そして希望に満ちあふれていた」。しかし、三、四年後に「文化大革命」が始まると、「民族的形式は否定され、風俗習慣、文化も認められず、民族の言語さえも不要とする主張が横行した」。その少数民族に降りかかった苦難を、この『中国現代少数民族文学選』では、よく描かれている（同書、二二〇～二二四頁）。

再び川口の経歴に話をもどすと、一九三五年に上士別村奥士別糸魚尋常高等小学校高等科（現在は士別市）を卒業し、四三年に横須賀海兵団に入団して、四五年に復員する。川口は、香港でイギリス軍の捕虜になり、捕虜収容所で社会主義を学んだと語っている（『民間歴史』<http://www.minkan-ishi.com>）。同年一月からは農業日雇い労働に従事していたが、四七年の七月末に村上国治が士別村の川口の家を訪れて日本共産党への入党を勧誘する。その後川口は、八月一七日に大雪山麓の比布村に村上を訪ね、ともに旭川地区委員会に行き入党している。入党の推薦者の一人は村上であつた。四九年の暮にできた名寄地区委員会の委員長になり、農業を辞めて党の常任活動家として名寄に出ている。そして五一年一月から五二年七月まで、川口は党北海道地方委員会の軍事部ビューローの仕事をするようになり、ここで白鳥事件と出逢つた。

## 二 白鳥事件と川口

ここで五〇年代の政治情勢を簡単に説明しておくと、一九五〇年一月六日コミンフォルム（共産党・労働党情報局）が突然、野坂参三の「平和革命」論批判の論文をだすと、これを支持する「国際派」（宮本顕治、志賀義雄ほか）と反対「所感」を発表した「所感派」（徳田球一・野坂

参三ほか)に大きく日本共産党は分裂する。同年五月三日、マッカーサーは、共産党の非合法化を示唆し、同月一五、一六日、北大で多くの学生が、GHQの民間情報局(CIE)顧問のW・C・イールズの反共演説に憤りを感じ、反イールズ闘争に立ち上がる。

同年六月六日、D・マッカーサーは、日本共産党の中央委員を公職から追放し、これを受けて日共北海道委員会議長、吉田四郎は非合法体制を敷き、活動は合法と非合法部隊にわかれる。そして六月二五日に朝鮮戦争が勃発すると北大では辛昌錫ら朝鮮人学生が、学業を放棄して祖国防衛隊を組織し、仙台、横浜などで反戦活動を行う。だが辛は一月に反戦ビラで逮捕され、弁護士布施辰治の活躍で釈放される。七月八日、マッカーサーは警察予備隊の創設を指令し、同月一八日には、「アカハタ」の無期限刊行を停止する。一〇月には、全学連はレドパーシ粉砕ストを提起し、東大、早稲田などでストライキが起こる。同月三十一日、GHQは政令三二五号で占領目的阻害行為処罰令を發布する。同年暮までに「所感派」グループの徳田らは中国に亡命し、「北京機関」(徳田の中国名をとって「孫機関」とも呼ばれる)を創設する。日本の共産主義史上、初めての海外指導部である。しかも共産党員の海外逃亡、北京機関の「日本人民軍」の武器購入費用は「トラック部隊」でのサギ商法や「人民艦隊」の密輸などによって賄われていた(増山太助『戦後左翼人士群像』つげ書房新社、二〇〇〇年、他)。

翌五一年一月二五日には、米特使J・F・ダレスが、対日講和問題で来日している。日本共産党は、第四回全国協議会(四全協)で最初の軍事方針を決定する。九月八日、サンフランシスコ講和条約、日米安保条約が調印される。一〇月一六日から一七日にかけて、日本共産党は第五回全国協議会(五全協)で、五一年綱領が採択され、米帝の「ついた

て」吉田茂内閣打倒の「民族解放民主革命」の軍事路線が確定する。一〇月には、北大生高安知彦、門脇茂、村手宏光らが中核自衛隊に入る。隊長は穴戸均で、最初は学内パトロールが中心で、やや遅れて北大生鶴田倫也、大林昇も加わる。一月には、川口孝夫が、道地方委員会軍事部ビューローになるが、桂川吉伸が北大民主青年団での活動を離れて、川口の下で「道軍事部門テク(連絡係)」になる。桂川自身は、入党は潜行して東京に行つてからだと言っている。

同年一二月六日、独立自衛隊は第一回赤ランブ事件を起こし、北四条東四丁目付近の函館本線で貨物列車を止め、石炭を奪うつもりが、混合列車と間違つてしまった。一二月一〇日の第二回赤ランブ事件では、前回の反省に立ち、白石駅寄りの雁来大橋付近で試みるが、付近の人に不審に思われて中止している。鶴田、大林も初めて参加するが、柴田誠一(札幌西高)、橋本(同東高)、赤石(同南高)ら高校生民青員も参加したといわれている。

同月中旬に川口は、植野ほか一二名の北大生を引き連れ幌見峠で拳銃の射撃訓練を行っている。同月一九日には第三回赤ランブ事件が起こる。場所は第一回目と同じ北四条東四丁目だが、パトカーを見かけ慌てて中止し失敗している。同月二〇日から二七日頃、中核自衛隊員らは千歳郊外祝梅、阿宇砂利、豊平町常盤で山村工作隊に入っている。また同月二七日には、餅代よこせ要求で自由労務者と市役所に座り込み、北大関連では高岡健次郎、小島正治の二名が逮捕されている。

この日東京では、練馬区旭町駐在所の印藤勝郎巡査が、何者かにおびき出されて殺された練馬事件が起きる。最初の警官暗殺事件である。同月二八日、穴戸均からの連絡で山村工作中的の隊員らは、座り込み団の逮捕で急遽帰札し、二九日の夜は塩谷検事宅に投石し、三十一日夜には、



高田札幌市長宅へ投石している。

年が明けて、五二年一月二日、村上国治（共産党札幌委員長）は、宍戸均と中核自衛隊員を集めて、北学寮（北大男子学生寮）の大林昇の居室で、ファッショ的警官に実力攻撃を加える対警宣言について協議している。同月四日頃、門脇宅もしくは寺田宅（村手下宿）で、村上委員長が白鳥の動静調査を指示している。この頃、中核自衛隊にポンプ職人佐藤博加わっている。一月初旬、中核自衛隊員は、札幌郊外幌見峠でプロニング銃の試射を行っており、この時手榴弾も実験している。同月一〇日頃、川口は北大米沢講師（化学）の教室で、宍戸均、佐藤博、植野光彦に会う。初対面の佐藤博が川口に、「白鳥を殺したら浮くか、浮かないか」と尋ねるが、川口は咄嗟に「浮かないだろう」と答えた。この後、白鳥暗殺を中止すべきだと道委員長の吉田四郎らにレポを走らせたが、吉田からの返事はなかった。

同月中旬（二五日か）、佐藤博がススキノ近くの西創成小学校付近で、白鳥警部に拳銃を発射するが失敗している。この後高安、門脇らで拳銃をオーバーホール（解体修理）している。同月二一日、午後七時一〇分頃、札幌市南六条西一六丁目付近で、札幌市警白鳥一雄警備課長が射殺される。実行者は佐藤博だが、鶴田倫也は白鳥警部の発見時まで同行していた。だが自転車一台しかなかったため途中で佐藤と別れて、鶴田は徒歩でポスト（連絡先）の伊藤仁宅に行き、先に到着していた佐藤からブローニング銃を受け取り、伊藤宅の石炭小屋に隠し、翌日鶴田が石炭の中から取り出して桂川吉伸に渡して、桂川から銃を受け取った宍戸均が近郊の畑に埋めたと言われている。また、自転車は宍戸が警察署の駐輪場から持ち出し、事件後何食わぬ顔で返したらしい。

同月二二日、独自隊のメンバーが大林の北学寮に集まり、村上が「天

誅ビラ」を書いている。高安が夕方機関紙共同印刷で校正、し、ビラの最後に「日本共産党札幌委員会」の署名を入れる。翌二三日、天誅ビラが北大正門前や苗穂工機部などで撒かれている。

### 三 逃亡の日々

五二年一月下旬に、川口は村上と会い、佐藤博を匿う（逃亡）の相談をしている。二月初旬に、村上は川口に佐藤博を匿うように正式に依頼している。佐藤はこの後、奈井江の白山炭鉱から北見枝幸、札幌、千歳、西足寄柏部落へ潜行している。そして佐藤は、川口の指示で同年一〇月初旬に東京へ逃亡している。二月中旬には月寒のシンパの住所である元陸軍将校官舎に中自隊員が集められ、村上より「諸君らは札幌の軍事委員会に直属する形で活動してきたが、今後は発展的に解散してそれぞれの所属場所で頑張ってほしい」と言われた。中核自衛隊の解散である。三月に川口は、旭川駅で逮捕されている。

この頃は、全国で武装闘争が激化して、五月一日には皇居前広場で「血のメーデー事件」が起こり、六月の二五・二六日には大阪で吹田事件が起こっている。北海道でも、六月三日の中村翫右衛門ら「前進座」の札幌公演の防衛に、中自隊ら出動し、赤平の公演で翫右衛門と警官隊が対立し、翫右衛門に逮捕状がだされる（赤平事件）。翫右衛門は中国に亡命し、北京機関にも参加している。

七月七日、名古屋で大須事件が発生するが、同月一四・二五日、旭川・小樽で火焔ビン事件が起こっている。七月一五日、暴力行為をたしなめる徳田論文がだされるが、同月二二日、「破壊活動防止法」が制定される。八月の中旬には、七月一五日の小樽火焔ビン闘争で壊滅状態にあった党組織再建のために鶴田が小樽に転出している。一〇月一日、鶴田は突然

小樽で衆議院選挙のため遊説中の杉之原舜一候補の応援に顔を出している。しかし鶴田は、一〇下旬に小樽で官憲の目が光っているのを察知して、日鋼室蘭に移動する。この頃中自隊の隊長格の穴戸も千歳地区委員長へ転じている。

この頃になると、八月二八日に逮捕された佐藤直道（札幌委員会副委員長、後に離党）が、一月二八日に自供を始める。また一〇月一日には、村上周治も選挙運動中に逮捕される。一〇月初旬には、佐藤博は村上逮捕の報を聞き一日中毛布をかぶって泣いていたそうである。佐藤は、この頃川口の指示で西足寄を去り東京に移っている。

翌五三年の一月から半年間、共産党の第一次総点検運動が始まり、自己批判や警察のスパイ摘発が激しくなり、党内でもリンチ事件や自殺が起こっている。一月の中旬頃、拳銃を提供したといわれる斎藤和夫の自宅が搜索され（山田清三郎『白鳥事件』新風社、二〇〇五年）、この後に斎藤は難を逃れて中国へ亡命している。四月八日には、爆発物取締法違反の容疑で、村上の第一回公判が始まる。翌九日には、東京の同盟通信社で働いていた追平雅嘉（共産党道委員）が逮捕され、月寒派出所で「手記」を書き始める。

四月二一日、北大生辛昌錫が赤ランプ事件関連で逮捕される。四月二五日、同じく北大生の門脇成が、兄の家を出てそのまま行方不明になる。五月の中旬には、門脇や村手ら北大の中自隊員は東京で運送業をしている男を頼って上京している。桂川もこの頃東京に行ったと言われるが、これらの東京行きは、吉田四郎、川口、鶴田が計画したと思われる。六月九日、高安知彦が名寄駅で逮捕されている。高安は黙秘で頑張るが、中央署から月寒派出所に移され、約一カ月後の七月二一日、「党籍除名申請書」を書き安倍治夫検事、次いで高木一検事に自供を始めている。

六月二三日、苫小牧署に留置中の村上周治に菱信吉特別弁護人が接見している。その時村上は「とくにもぐらせた人間は絶対に活動させぬ様、出来れば国外へやつてもらいたいことを支店に伝えてもらいたい」とのレポを渡したと言われる（「最高裁特別抗告棄却決定書」裁判資料）。これが中国への大量亡命の起点と考えられる。しかも、七月八日に菱特別弁護人から国治レポを渡された矢内鷹雄は、札幌で逮捕されて、村上の指令は警察に知られている。七月二一日村上は、苫小牧署から逃亡を企てるが失敗している（一回目）。七月二七日、朝鮮戦争は停戦協定を調印する。八月には、川口は東京都委員会へ配置転換になる。五四年一月妻栄子も東京へ移動されるが、この決定は吉田四郎によると推測される。

八月二〇日、佐藤博、穴戸均、北大生の大林昇、鶴田倫也、門脇成ら中核自衛隊員、また北大生植野光彦、民間人斎藤和夫は拳銃や爆弾の関連で全国指名手配を公表される。九月一八日、北大生の村手宏光は、心性反応で療養中の長野で逮捕される。この年の一二月末、共産党は翌五四年五月まで第二次総点検運動を展開する。

五四年の一月中旬には、村上は苫小牧署から逃亡を企てるが失敗する（二回目）。その後二月一五日に三回目を企てるが失敗している。五四年初めには、東京に潜行中の八名は党中央統制委員酒井定吉から、組織の公然化のため匿うことができないと言われる。そして、それぞれ個別に中国行きを伝えられる。この通知をされた者はその年の春から三カ月ほど乗船訓練を受ける。桂川は乗船訓練を二回受け、そのうち一回は門脇と一緒にだった。門脇はこの訓練の後、都内の民商加盟の町工場で職工として働いている。五四年、大林、桂川、鶴田らが京都へ移り、五五年九月には大阪へ移っている。三月二八日、北海道警は、佐藤博を

射殺実行犯として殺人罪で逮捕状を請求している。一〇月一八日、佐藤直道に懲役三年執行猶予四年の判決が下される。この後、佐藤は全国の中自隊の裁判に、検察側証人として登場するようになる。

五五年一月一日、共産党は「赤旗」社説で、極左冒険主義を自己批判し、共産党は公然化を宣言する。三月三〇日、佐藤博、門脇茂が焼津港から「人民艦隊」で上海へ密航する（『朝日新聞』五八年四月一四日付）。四月一四日、北大生で軍事部門を担当していたといわれる植野光彦と間違えて、京大生の玉井仁全学連委員長が逮捕される。この裁判で、ますます警察不信が高まって来る。五月、民戦が解散されて朝鮮総連が結成される。この頃、佐藤博と穴戸均は九州に、門脇と斎藤は関西にいたことは確かである。

五五年七月二五日から共産党は第六回全国協議会を開いて、「極左冒険主義」を自己批判するが、ソ連共産党の指導で開かれたこの会議では、大スターリンがかかわった五一年綱領の軍事路線は撤回されていない。八月になると、朝鮮人党員は、日本共産党から離党して、朝鮮労働党に加入するように、という一国一党原則が出される。鶴田倫也と桂川吉伸は東京から大阪に来て待機しており、門脇と斎藤は関西にいたらしいが詳細は不明である。八月一六日、村上は、白鳥事件の首謀者として殺人罪で追起訴、高安、村手は殺人幫助で起訴されている。

一〇月になると、北大生大林昇、桂川良伸らは「人民艦隊」で上海へ亡命したと「朝日新聞」が報じている。実際は、穴戸均、植野光彦、斎藤和夫が中国へ亡命したらしいと言われている。一月に川口は、統制委員梶田茂穂の命令で、北海道委員会村上由も同席のもと、白鳥事件の検事調書を読ませ真偽のほどを点検させるが、川口は概ね高安証言通りだと確認する。このことは党中央も北海道委員会も知っているはずと

言われている（『流されて蜀の国へ』）。

#### 四 中国の日々

五六年三月一三日、川口夫妻は「人民艦隊」で中国へ送られる。実際はこの時、川口夫妻と鶴田、大林、桂川の五名が中国へ渡っているが、六全協以後のことであつた。他の亡命者五名は、六全協以前に中国へ渡つたといわれる（『流されて蜀の国へ』）が、情報が錯綜しているため、六全協以前に渡つた人については判然としないところがある。川口と共に亡命した五人は、上海呉高松港に上陸、北京の中国共産党中央対外連絡部招待所に入る。そこで、日共代表袴田里見の代理羅明（中国人日共党員）から査問を受けている。袴田とは一度も顔を合わさなかった。五月一日になると事件関係の亡命者たちは、天安門で中国のメーデーを見学している。このメーデーを見て川口は、「私は言葉には言い表せない興奮を感じ、涙を流しました。解放後に祝われた中国のメーデーと、血まみれのメーデーを象徴とする日本のメーデーを比較すると、私は感嘆の意を表します」と語っている（『民間歴史』）。

白鳥事件関係者は、中国人民大学分校（校長連貫）に移る。門脇のペンネームは大石秋夫、桂川は牧耕二であつた。北京西郊外の人民大学校に着くと川口は、連校長から「日本革命が勝利しないかぎり、貴方たちは帰国できない」と言われる。「中国人民大学校」は、中国、ソ連、日本の共産党が協力して日本革命幹部を養成する研究機関で、校長は中共の副大臣によって兼務されており、「教育と科学研究は中国の教師と日本側のテーエーチングアシスタントによって行われていたが、教育の実質的な権限はソ連に委ねられていた。日本人学生は、「1、抗日戦争中の八路军に参加した人、2、満州鉄道株式会社に滞在した戦前の左



翼、3、一九五〇年以降に日本から送還された人びと、4、解放戦争中の人民解放軍に参加した人、5、解放後に中国に残った人びとであった」。

学校の校庭は壁に仕切られて畑のなかに建ち、門には兵士が立っていて、「中国の社会の現実からは完全に隔離され、「桃源郷」のように見え」た。食事も豪華で、肉や魚が食卓に並び、「ワインはすべての種類が販売されて」いた。川口は、次第に中国社会の現状に触れて、「この学校生活は、中国人民の血と汗の果実を享受して」おり、「現実社会から孤立している場所でドグマを学ぶことは想像できない」と考えるようになる（『民間歴史』）。

翌五七年になると、札幌地裁で第一審判決が出され、村上は無期懲役に、村手には懲役五年が求刑された。中国の白鳥事件組一〇人は、七月になると、四川省へ行き、中連部（中国外交部）から出されたいくつかの条件から自分たちの進路を選択した。一〇人は成都市と重慶市の各単位に配属されるが、重慶市配属は川口孝夫、栄子夫妻が希望する。宋戸均らは四川省中共第七中級党学校に、門脇成は重慶水輪機廠の旋盤工に、佐藤博は重慶鋼鉄の炉前工に、斎藤和夫は重慶美術院に、桂川吉伸（牧耕二）は西南師範学院中国文系に配属された。成都市配属は鶴田倫也、大林昇、植野光彦であった。「整風運動（反右派運動）」が始まり、川口孝夫（田一民）は、月給九二元の一七級国家幹部になり、妻栄子（李連英）は月給七八元の一九級国家幹部になって、六九年まで党学校に在籍している。二人の収入を合わせると、「普通の生活は十分で、お金を貯めることが」できた。しかし六〇年以降、「食糧不足はより深刻」になってくる。この六〇年代初頭の飢饉を毛沢東は「天災」だとしたが、川口はこれを「天災」ではなく「人災」だと語っている（『民間歴史』）。

五五年四月一三日の「読売新聞」は、警視庁が「人民艦隊」事件に

関連し一〇名を逮捕したが、「人民艦隊」は白鳥警部射殺事件の主犯とみられる佐藤博、同ほう助容疑の門脇成、大林昇、爆発物取締罰則違反容疑の桂川吉伸らを、中国に密航させたと報じている。その時期は、佐藤、門脇は五五年四月中旬、桂川、大林は同年十一月であるとしている。五八年七月になると、北京機関は解散され、北京機関従事者は、在中日本人引揚船白山丸で帰国している。しかし同年八月からは、重慶で白鳥事件関係者が学習会を組織しており、その主宰者は川口であった。この頃、川口と鶴田倫也（張子明）は成都に移り、桂川と佐藤は重慶に残るが、門脇（谷学林）は重慶市党学校中共史研究室へ移っている。

六一年三月頃、日共は北京代表部を復活しており、日共第八回大会で宮本顕治の指導体制が確立している。成都市合同学習会で、川口が日共大会決議を擁護し、新中央委員会支持を打電している。門脇（江相太）は批判派であったが、日共中央の指示により門脇は四川外語大学で英語を学習することを命じられる。同年八月、桂川（周明）、佐藤は、重慶の西南外語学院に転校、フランス語を学ぶことを命じられている。

六二年七月、川口が北京に行き、日共代表部（代表・羅明）に会い、白鳥事件関係者の中国残留党員の組織の復活の承認を得る。六五年まで、党組織のキャップは川口、副は鶴田であった。川口は、中国社会に深く入り、社会主義建設に参加する決意を述べた。六三年に白鳥事件関係者は、日共中央から独身者七名の結婚許可を得て、翌六四年に結婚している。

六三年日共は第八回大会の決議で、白鳥事件の対策、ベトナム抗米救国闘争支援への派遣などを決めている。白鳥事件関係者の結婚は、川口一人で日共北京代表と話し合っただけであり、もちろん日共の指導下になされた。川口は、「彭県工作」を命じられ、「四清運動」に参加して、彭県政府農業副局長に就任する。門脇と大林は、抗米救国闘



争支援のためハノイ（北ベトナム）へ派遣される。門脇（江相太Ⅱザン・ドウオン・タイ）は、ベトナムの声短波放送局へ六四年まで派遣される。大林は日本語教室を開いている。

六六年から「文化大革命」が起こるが、六六年三月の宮本・毛会談で、宮本らはコミュニケにソ連修正主義批判を入れること拒否して中共と断絶する。同年六月に、川口は彭県から成都党学校へ戻り、同年八月末に川口は北京へ行き、日共の砂間一良に会っている。六六年秋には、門脇が日共中央に、ベトナム抗米救国国際統一戦線及び議会主義一辺倒路線についての意見書を提出している。これに対して、六七年二月、日共中央から門脇に除名処分が通知されている。六六年一〇月の日本共産党第一〇回大会に、川口は批判的な意見書を提出している。

この時、六六年一二月に、川口は西沢隆二（筆名ぬやま・ひろし）と接触しており、西沢は「五一年綱領の制定過程」と「伊藤律の逮捕」の経緯を川口に語る。西沢の話では、一九五一年四月、スターリンは北京の徳田、野坂、西沢、河田賢治ら主流派幹部と国際派から派遣された代表の袴田里見を別々にモスクワに呼び寄せた。中共の国際部長王稼祥と副部長李初梨が同行しており、徳田らの提出した綱領案をスターリンが書き直している。「日本の当面する革命は、革命的な土地改革の内容を持つ民族解放民主革命」であるとされる。同年一二月、中国で外国人の文革参加が認められ、この表明大会に川口が参加して、「無産階級戦闘隊」の組織を結成した。

六七年一月二七日、北京の日共左派が造反声明を発表し、日共と決別し、間もなく造反組は日共から除名される。この時、中国亡命中の白鳥事件関係者も除名される。六七年三月には、日本で善隣学生会館事件が起こり、中国人留学生と日共党員が衝突し流血の惨事を起こして、日

共と中共との関係は最悪になる。この頃、川口は上海市、済南市、ハルビン、大慶油田などを訪問している。しかし六七年四月、文革で川口は罷免され、党組織キャップを降りて、鶴田（張子明）に代わる。六六年八月に北京に行き、各地を参観して成都に戻ったことが、川口罷免の理由であった。この時、大林昇、門戎がベトナムから北京に戻っている。

六七年八月三・四日、日共北京代表の砂間ら赤旗特派員が北京を引き揚げる時、日共左派や紅衛兵によって、北京空港で暴行を受けるといふ事件が起こり、日中の共産党の関係は一層悪化する。川口はこの現場にいて、砂間らを庇うが、川口自身が監禁され査問を受けることになる（『民間歴史』）。門脇は、ハルビン、大慶油田、太原（山西省）、大塞（陝西省）、上海への招待旅行に行っている。六八年になると、門脇（林浩一）は、北京週報社に訳文改稿専門家として招聘されている。

六九年四月には、佐藤博が党組織のキャップになっている。門脇は、四川省成都の中型工作機製作所で旋盤工となる。七〇年になると、川口は党キャップに帰り咲いている。白鳥事件関係者は、楽至県へ疎開を命ぜられ、門脇は、四川省楽至県に疎開し、農業機械修理工場旋盤工になる。七一年四月に、白鳥事件関係者は、楽至県から成都に戻る。川口、門脇は、成都市紅旗紫油機工廠で、旋盤工になる。これらは文革の一種の「下放」運動である。後に門脇は、成都工学院（四川聯合大学）で日本語教師となり、川口は四川医学院で教えるようになる。

## 五 帰国の後に

七二年九月の田中角栄首相の訪中によって、白鳥事件関係者の帰国への途が開かれる。七三年二月一三日、川口夫妻と桂川夫妻を乗せた川崎汽船「聖山丸」が北九州市若松湊に着いた（『流されて蜀の国へ』）。

川口夫妻は、札幌市内で中国物産を扱う小さな店を経営していたが、七四年秋に客として訪れたのが斎藤孝であった。彼は東京理科大学を中退し、毛沢東を支持する反日共系団に参加していたが、独自に白鳥事件に興味を持って川口に接近する。七五年四月一〇日、警察庁は佐藤博、鶴田倫也、門脇茂、大林昇について国外逃亡が立証されたとして時効を停止して、新たに全国指名手配にしている。同年五月九日、北大生植野光彦が、羽田に帰国している。

七五年には、北京にいた大林昇、門脇茂から日本共産党（左派）関東政治局に手紙が出されている。その要点は、「川口は警察に通ずる危険があり、今後は彼らの帰国問題からはぜ」というものであった。新宿区市ヶ谷台町の日本共産党（左派）関東政治局の事務所政治局員の川口ら五名、それに三好一がオブザーバーとして参加して秘密会議が開かれた。他の四名は賛成し、川口は帰国問題からはぜすることが決議された。この数日後、室井、渡辺の政治局員が来札し、桂川吉伸、植野光彦、鈴木時雄（関東派北海道委員会の副責任者）に秘密会の内容が伝えられる。今後は桂川を責任者と決めて、川口を事件関係者の帰国問題にタッチさせないと決定した。そのため一九七七年の門脇、翌年の大林帰国の際、関東政治局は札幌での彼らの支援活動を全く行わなかった。

同年一二月二六日、銃刀法違反容疑の斎藤和夫が羽田に帰国している。道警はこれを契機に斎藤和夫宅や、先に帰国した川口孝夫、桂川吉伸、植野光彦宅を出入国管理令違反容疑で家宅搜索している。しかし、同月の二八日の「赤旗」では、帰国した五人はいずれも「反党盲従分子」と報道されている。

七七年一二月二日、門脇茂が羽田に帰国するが、一四日に検察は起訴猶予決定する。門脇は敬称なしの「赤旗」報道を批判する。二九日の

「赤旗」は、門脇が共産党に不当なホコ先を向けたと報道している。翌七八年六月三日、大林昇は、羽田に帰国している。同年六月九日、大林帰国関連で、北大生の大林、門脇はベトナム・中国共産党が友好関係にあった時期に、両人はベトナムで「日本語関係の仕事に従事」していたが、両党が対立するようになって追放同然に北京に帰国と「北海道新聞」（以下「道新」）は報道している。同年六月一五日の殺人幫助、出入国管理令違反は処分保留となるが、住民登録事件の公務執行妨害を理由として収監される。しかし、一二月七日には、大林に懲役八ヶ月執行猶予二年の判決が降りている。

八一年に、北海学園の橋本剛（社会思想史）の研究室に斎藤孝が訪ねて来て、以後しばしば訪れて親しくなる。八五年一月一八日、新聞各紙が、「村上国治／自転車泥棒」と報道する。同年七月二〇日には、第四〇回国民救援会全国大会（岐阜県下呂町）で、村上国治の副会長職が解任される。八八年一月一四日、実行犯とされた佐藤博、肺がんで北京にて死去（六四歳）する（「道新」報道）。同年二月二七日、穴戸均（関東三）、北京にて肝臓がんで死去（五九歳）している（「道新」報道）。佐藤、穴戸は、北京郊外の革命戦士の墓に埋葬される。この後、元北京機関にいた吉留昭弘が佐藤、穴戸の遺骨を持ち帰り、北海道へ郵便書留で宅送したとしているが、これに桂川は疑問だとしている。

九三年に渡部富哉が『偽りの烙印―伊藤律・スパイ説の崩壊』（五月書房）を刊行する。川口はこれを斎藤孝より借りて読み、同じように白鳥事件についての出版を意図する。九四年一月三日、村上（小林）国治は自宅火事で焼死する。失意の自殺ではないかという声もあるが、警察はこの検死結果を公開していない。九四年から九八年まで（九七年は除くが）。北京に滞在していた元札幌商科大学（現在の札幌学院大学）

全共闘の飯塚英明（コープ札幌職員）が、しばしば鶴田倫也（唐沢民）に会うようになる。その際帰国するらしい話を本人から耳にする。ただし帰国後、事件の真相を語る決意をしたとは信じ難いと飯塚は言う。九六年頃飯塚は、「兄が帰国に反対する」と鶴田から聞いている。また帰国しても事件の真相を語る意思はないとも聞いている。九七年春、鶴田が成都（四川省）を斎藤孝と会うため訪れた際、斎藤は植野の見舞いがてら帰国する意志はないかと鶴田に相談したところ「ばかげた話だ」と一蹴されている。

九五年四月、斎藤が何度か川口が経営している亜東書店に顔を出すうちに、川口夫妻と親しくなつて、前年の村上国治の死去をきっかけに、支笏湖温泉のホテルに部屋を取り、テープを用意し聴き取りを試みる。川口夫妻は、斎藤の質問にのりくらりとはぐらかすのみで、改めて事件の重さを知らされる。翌五月、飯塚は桂川との合弁会社設立の相談で中国を訪れている（北京週報社）。

同年の十二月、当時、動労追分（北海道）の反戦書記をやっていた斎藤孝が、札幌から渡部のもとにやって来て『偽りの烙印』の手法で「白鳥事件」を書きたいので資料協力を要請した。この時斎藤は、白鳥事件の実行者を佐藤博だとして、宍戸均・鶴田倫也を共犯者とみなしていた。佐藤、宍戸の両名が死亡したので、鶴田も日本へ帰国の用意がある。「たとえ五年の実刑判決があつたとしても、二、三年くらいで釈放にならないか」と考えるが、川口がその受け入れ条件をつくるのに動いているので、渡部も川口に会つて協力してくれないかと語っている。斎藤の紹介で川口夫妻は渡部富哉と初めて会い、事件について共同執筆をする計画を立てる。新橋駅前の中華料理店で、五月書房社長ら一〇名ほどで川口夫妻の歓迎会が開かれる。（これは、九六年九月に川口が中国に行った時か

もしれない）。

九六年一月九日、飯塚と桂川が中国へ行き、北京外国語大学で日本語講師をしている鶴田に会っている。何日か経つて鶴田宅で、飯塚、桂川らが一緒に酒を飲んでいると、突然「あんたは川口の子分だろう」とからまれた。そして、「俺らのやったことはオウム真理教と同じだという奴がいる。俺はな、単なるやくざ者で白鳥をやったのとは違う。あんなごろつきやって何が悪いんだ」と言い、続けて「あんたらは経済主義だろう。おれはここにおいてもプロレタリア国際主義の立場から日本革命を考えている」と酔いつぶれてしまった。その時、すぐ上の階に住む佐藤博の娘もいた。帰国後飯塚がこのことを川口に伝えたと言われている。

九六年夏、斎藤孝と渡部富哉が松本市四方博物館で「白鳥事件関係資料」の調査を行っている。斎藤は塩尻温泉（松本市）に宿泊したと語っているが、村松憲治談では、「記憶は定かではない」としている。この頃に、斎藤が川口の原稿を北海学園の橋本教授のもとに持参し見てくれと言っている。中国語的表現が多く、橋本は三分の一くらい書き直した気がすると言っている。この頃に斎藤の紹介で、橋本は川口夫妻に会っている。また学生時代に多少知っている高安を紹介され会つたように思うとも語っている。九六年の九月には、川口夫妻、斎藤孝が四川省を訪問する。帰途川口栄子と斎藤が北京で観光中に、鶴田は突然犯行に使われた自転車の出所、事件後の拳銃の処分などを自ら進んで語った。質問以外にも自発的に話してくれた。孝夫は風邪のためホテルにいたが、妻からこのことを聞いた。鶴田との長い付き合いで一度も聞いたことのない内容だった。

九七年の二月上旬には、以前に「徳田球一とその時代」を作成したNHKの片島紀男ディレクターと渡部とで、白鳥事件の真相をビデオ化



して放映し、鶴田帰国の援助と防衛のための世論づくりしようと、札幌で撮影を開始している。多分この時、渡部は川口、高安にインタビューしている。渡部の『偽りの冤罪』によると、九七年二月末から三月上旬の札幌雪祭りの時だといっているが、この年の雪祭りだとしたらこの時期ではなく、二月上旬に開かれている。また、同書によると札幌での撮影開始を〇二年の二月上旬とし、その直後に「道新」などに鶴田が中国に潜伏していたことが報じられ、どんでん返しがあったとある。新聞が鶴田が中国にいることを報じたのは九七年だから、九七年二月上旬のことではないかと思われる。札幌へ二度来たとも考えられず、渡部のこのあたりの記憶に混乱が見られる。

九七年四月に、川口と斎藤は四川省成都を訪問している。斎藤は鶴田を聴き取り目的で成都に招待し、この時は公表を前提としていた。鶴田は三時間かけて飛行機で到着する。二人は杜甫草堂で、一日かけて事件の真相を聞いたが、この時は斎藤孝の妻も同席していた。斎藤夫人は、膨県（中国四川省）で約一年間鍼灸の修業をし、それを迎えに来た斎藤と同席したと思われる。後に札幌医大近くの中村記念病院に勤務するが、彼女はこの時の会話を全否定しており、鶴田に不信感を持っている。ただし、後に鶴田は語った内容の公表を拒んだ。斎藤帰国の際、写真に鶴田が収まり二人は驚いている。斎藤帰国後、川口と鶴田の帰国問題について約一週間話し合っている。この時、帰国後は真相を語ること、弁護士は国選弁護人にするなど都合したと言われる。

川口が鶴田を成都に呼び出した理由は、『流されて蜀の国へ』に使う挿絵を斎藤の弟博之に依頼し、画家たちへの通訳を鶴田に頼んだようだ。鶴田は成都市で画家たちの交流会があるので、その通訳を頼まれて引き受けたらしい。鶴田は成都の公園で斎藤夫妻と話し合いの後、この動き

の背後に危険なものを感じ取り、これを機に彼らとの関係を切った。後に鶴田は斎藤夫妻にデタラメを話したと桂川に手紙で書いている。

九七年六月三日、時事通信社の信太謙三記者が鶴田に接触している。この頃、鶴田の兄が帰国に反対する意思を伝える。九七年六月七日、道新佐々木北京支局長より、時事通信信太北京特派員の「鶴田容疑者、北京で生存」という配信記事の件で飯塚に電話が来る。六月八日、道新などの主要紙は、鶴田倫也が中国にいることを報道している。そのため九七年六月中旬、日本の警察が国際警察機構を通じて中国に身柄引き渡しを要求する。しかし中国側は、「そのような人物はいないと」と回答している。

同年十一月、川口孝夫は『流されて蜀の国へ』原稿を五月書房に持ち込むが、「白鳥事件」との関連記述を求められる。原稿は鶴田に見せて訂正したとあるが、疑問である。少なくとも最終章の「白鳥事件」の部分は急遽追加したため、鶴田は読んでいない。翌二月に、鶴田の帰国意思の確認のため、川口夫妻と斎藤は北京へ行くが、中連部へ鶴田に会いたいと伝えるが会えず、「彼は元氣だ」と回答されるのみだった。中連部は公表に反対と表明して、川口、斎藤はしゃべり過ぎだと叱責される。川口らは、これを中国との絶交宣言だと受け止めている。

九八年前後、川口と斎藤が九州の松本清張記念館で、高安が「日本のユダ」というコーナーに展示されているのを見て憤りを感じ、斎藤の仲介で川口が高安に会うことになる。（高安によると、斎藤の紹介で川口に初めて会ったのは、『流されて蜀の国へ』が刊行されて一年以内だったと言う）。この頃、北海道の公安事件を弁護した杉之原舜一弁護士が入院、自由法曹団仲間の石川元也（松本市出身）を介して、過去の弁護士資料（ダンボール箱約三〇個）を日本司法博物館（松本市）に寄贈する。



九八年三月六日、鶴田の愛娘が逝去するが、鶴田は姿を隠し娘の葬儀にも出席しなかった。妻の実家の四川省重慶にいたらしい。同年三月二六日、川口が単独で北京を訪れ、中連部を通じ最後の確認をする。三月三〇日付で鶴田から返事があり、「斎藤に話したことを公表するな。NHKに発表するのは敵を利用することになる。何かをする時には、大林、荻窪（旧姓犬田）、桂川と相談すべきだ。真相の発表は関係者が全て死んだ二〇年後か、事件発生後一〇〇年たってからだ」と言ってきた。川口はこれを縁切り状と受け止めた。斎藤はこのファックスを渡部、五月書房社長、NHKディレクターの片島に転送した。この頃、川口は「渡部がこの件に介入するなら五月書房からの出版を拒否する」として、五月書房からの出版を断念したと思われる。鶴田の帰国の援護のために、川口孝夫、斎藤孝、高安知彦らで準備していた事件の真実を伝える本の刊行を中止する。川口は中連部が反対しようと思えば公表すると主張したが、斎藤は川口を孤立無援の状態に置くのに忍びなく出版を中止する。

九八年七月に日・中共産党は、三二年ぶりに和解した。同年七月二九日、植野光彦は、妻の実家の中国四川省彭県で逝去した（享年六八歳）。同年一〇月、川口は数年前から準備していた『流されて蜀の国へ』をサンケイ総合印刷から自費出版した。原稿は鶴田に見せて訂正したと言われているが、最終章の白鳥事件関連の部分を鶴田は知らない。その後、桂川、門脇からの批判が起きる。特に高安への松本清張記念館での人身攻撃を見て、それまでどちらかという公表に消極的だった妻の栄子も、断固公表すべしに転ずる。また中国に亡命した画家、斎藤和夫も事件への関与を語り出版に賛同している。

同年一〇月二九日、道新が「元共産党軍事部門幹部が証言」として、同書を紹介している。白鳥事件に関して大筋で檢察主張の通りだと報道

する。しかし一二月になると、中国亡命から帰国した元北大生桂川吉伸が、「川口孝夫の変節を評す」と、川口の著書を痛烈に批判する文書を配布する。また川口著書発刊から一年以上経過した二〇〇〇年六月一五日には、もう一人の中国亡命から帰国した元北大生門脇成（現姓荻窪）が、「ある『歴史的真相』について」と題して、同著を痛烈に批判する文書を配布する。二人の批判文書、なかでも門脇がかつての仲間である高安知彦を痛烈に批判しているのを見て、川口は事件の真相を詳述する決意を固める。それに妻の栄子や中国亡命仲間の斎藤和夫も賛同する。

同年七月斎藤孝はどうしても白鳥事件の裁判記録を一読しておかねば不安が残るといい、司法博物館へ文書の閲覧を願ったが、未整理のため閲覧できなかった。その間に北海道の白鳥事件対策協議会は、裁判資料を北海道に返せと市民運動を始めるなどのこともあり、博物館から渡部にボランティアで裁判資料の整理をしてもらえないかと要請があった。渡部は東京在住の有志一〇名くらいで松本に出掛けたが、斎藤も北海道から駆けつけた。

〇一年九月一八日、川口栄子が逝去した（享年七八歳）。同年一〇月、鶴田の北大時代の学友辛昌錫が古希記念旅行の折に、北京外語大官舎で半世紀振りの再会している。その時の鶴田発言では、遺産相続のための失踪宣告を得られなくなったので兄が、帰国を促していると打ち明ける。辛は帰国は百害あって一利なしと止めた。

〇二年一月二二日、「道新」が白鳥事件五〇年に当たり、「白鳥事件で殺人容疑の佐藤博、穴戸均が、八八年北京で病死」と報道している。同年二月川口が遺稿のつもりで書いた、『いまなぜ「白鳥事件」の真相を公表するか』の原稿を、最終的に完成させたのはこの頃である。そして〇四年一月一〇日、川口孝夫は逝去している（享年八三歳）。川口

夫妻の遺骨は、同年一二月二二日、四川省彭州市で散骨されている。○九年には大林昇も逝去している（享年八二歳）。

一一年三月二七日には、「インター」が聴こえない―白鳥事件六〇年目の真実（後藤篤志構成、HBCラジオ）が放送される。同年一〇月に、「インター」が聴こえない」がギャラクシー大賞を受賞したので、北大近くのチャペルセンターで、ジャーナリスト会議主催による、放送を聴く会と後藤篤志の講演会が開催された。その時、飯塚が斎藤孝に連絡し、斎藤は高安に連絡して参加した。飯塚が「鶴田が本気で帰国する気があったとは思えない」と発言した。また渡部富哉が、鶴田が帰国する時「国境を越えたところで日本の公安に手錠をかけるクライマックスシーンを撮ることになっていた」と語っているが、「本当か」と斎藤に聞くと「まったくの与太話」と応えている。斎藤は「鶴田さんは、いや分かった日本へ帰るとも言っていないし、渡部氏が言うようなリアリティのある話ではありません。NHKの教育番組担当の片島さんとの飲んだ時の話で、こうなったら面白いねということじゃないのかな」と語っている。

一二年三月、斎藤和夫が逝去している（享年九二歳）。そして同年三月一四日、鶴田倫也が北京で肺癌のため死去（享年八二歳）、日本の警察にDNA検査をされたくないからと遺骨は天津沖で散骨する。同年四月、白鳥事件六〇周年記念集会在明治大学リバイホールで開催される。渡部富哉、中野徹三らが講演し、高安知彦、大石進、吉留昭弘らも体験を語る。同年一〇月、札幌の小樽大サテライト（紀伊国屋書店三階）で、今西一、高安知彦、大石進、河野民雄らが講演する。

白鳥事件関連で、中国へ亡命したのは民間人では川口孝夫妻、中核自衛隊の隊長格の穴戸均、実行犯とされる佐藤博、それと拳銃を提供

したとされる斎藤和夫の五名、北大生関連では中核自衛隊の鶴田倫也、大林昇、門脇成、それと植野光彦、桂川良伸の五名である。植野については中核自衛隊員ではなかったが、爆弾など軍事技術部門担当といわれる。桂川は自身の亡命の理由について、「一時期、米軍や自衛隊に対する反戦工作とかレポなどの活動に従事した」（『蒼空に梢つらねて』柏艸社、二〇一一年）と語るのみで、白鳥事件との関連は依然として謎である。ただ、多くの人は白鳥事件と全く無関係に、中国へ行ったとは考えていないであろう。また、この事件の関係者が生存しているにも拘わらず、沈黙を守り続ける動きがあるのが残念である。過去の誤りを認める人間を、「転向」や「裏切り」という論理で糾弾するのも奇妙である。「前衛」党の「鉄の規律」というのも過去の遺物である。

川口孝夫妻については、亡命の時期について『流されて蜀の国へ』の中で五六年三月、静岡県焼津港から漁船（俗称人民艦隊）「第一勝漁丸」で中国へ渡ったと書いている。他の八人の内の一人の人は「朝日新聞」や「読売新聞」によると、上述したように何人かが組になって別々に渡ったとされている。ただ、佐藤博、穴戸均の民間人、北大生の植野、門脇については、いつ中国へ渡ったかはおぼろげにしか分からない。川口夫妻と鶴田、大林、桂川の五名は、六全協（五五年七月）以後、いわゆる人民艦隊で同時に中国へ渡ったことは明らかである。

## 遺稿 いまなぜ「白鳥事件」の真相を公表するか

川口 孝夫

### 目次

- 一、事件発生前後
- 二、東京への配置転換または一度目の追放
- 三、中国への亡命または二度目の追放
- 四、日本共産党四川支部
- 五、一八年ぶりの日本の土
- 六、帰国工作から排除される
- 七、「白鳥裁判運動」と日本共産党の逃亡
- 八、佐藤博、穴戸均両君の死と鶴田君の帰国問題
- 九、李鋭先生との出会い、そして私の自己批判
- 一〇、鶴田君の心変わりと帰国者からの誹謗中傷
- 一一、なぜ真実を覆い隠そうとするのか
- 一二、故村上国治氏を偲ぶ
- 一三、愚かな八〇年の人生を省みて
- 一四、鶴田倫也君へ
- 一五、最後の「一言」

### 一、事件発生前後

私は一九五一年一月上旬、日本共産党上川委員会から北海道地方委員会の軍事部門に配置転換されて札幌にきた。当時の北海道地方委員会の責任者、ビュUROキヤップは吉田四郎氏である。ビュUROの軍事担当は輪田一造氏で、私は彼の指導を受けていた。私の前任者は後に北海道一区選出の衆議院議員となる多田光雄氏だった。

私の仕事の内容は全道の党組織の軍事組織と軍事行動の状況と経験をまとめ、道ビュUROに報告することであった。また直属の組織には武器研究の組織があったが、活動らしい活動はしていなかった。

組織的にはこのような状況であったが、私自身取り立てて何をするということもなく、輪田一造氏とは会議を一度開いただけで具体的指導もなかった。そこで手始めに党札幌委員会の軍事部門の幹部である穴戸均君と連絡をとり、札幌の軍事活動と軍事組織の状況の把握に重点を置き、穴戸君といくつかの軍事の活動に参加した。ただ組織面からいうと札幌の軍事組織は党札幌委員会ビュUROの指導下であり、党地方委員会の軍事部門とは指導被指導の関係はなかったため、私の立場はあくまでオブザーバー的なものに留まっていた。私が参加した軍事活動は、「赤ランプ事件」、米軍真駒内基地の調査、朝鮮人奪還闘争などである。

一二月の中旬、穴戸均君に誘われて札幌の武器製造・保管の責任者植野光彦君、対警察予備隊工作の石川正止朗君と、学生数名を伴い幌見峠での拳銃の射撃訓練に参加した。私は実射をしなかったが、初めて射撃をする学生が暴発などの事故を起こすのを警戒して側で見ていた。この時使用した拳銃はブローニングである。ところがこの射撃訓練以降、

札幌の軍事組織からの連絡は切れ、特に毎日連絡を取っていた穴戸君からは何の連絡もなくなった。

私は事件発生の十日ほど前に北海道大学の化学の教室に米沢講師を訪ねた。先生は不在だったが、そこには穴戸均君、植野光彦君、一人の労働者風の男（佐藤博君）がいた。その時、私は彼らの「白鳥をやつたら、浮くか？」等の言動から白鳥警部を襲撃する計画を察知した。私は直ちに党の北海道地方委員会の責任者（ビュロキヤップ）吉田四郎氏と軍事の責任者（ビュロ員）輪田一造氏に緊急レボ（文書）で連絡し、党札幌委員会の責任者村上国治氏に指示して、白鳥射殺の計画を中止させるように要求した。だが吉田氏からも輪田氏からも何の返事もなく、一九五二（昭和二七）年一月二日夜に事件は発生した。

事件の翌日、穴戸君から事件は党札幌委員会の計画と指導による武装闘争で有ったと、事件の概要が報告された。更に先日、北大の化学の教室で会った労働者風の男は佐藤博君であることを知らされた。翌二三日に穴戸君から村上国治氏の書いた「遂に天誅下る！」のビラを受け取った。

一月の末だったと思うが、村上国治氏より穴戸君を通じて「会いたい」との連絡があった。会うと彼は「一人やバイ奴を匿うのを手伝ってくれ」と言った。その時彼は個人名を言わなかったが、私には「ヤバイ奴」が佐藤博君だとわかった。私は「そのような問題は組織的に解決しなければだめだ。個人的に解決しようとするのは組織原則に反する」と反対した。対して彼は「いまは組織も危ない。個人の方が安全だ」と言い、奈井江町の白山炭鉱でささやかな請負の組を率いていた場合信光（私の甥）の名前を出してきた。最後には彼に押し切られ、的場信光宛に紹介状を書き村上国治氏に渡した。そして、村上国治氏に「今後の連絡に

ついて私は関係しないから、クニさんが責任を持って絶えず連絡するように」と念を押した。その後、佐藤博君は私の紹介状を持って奈井江町の白山に行った。このように私は佐藤博君の逃亡を助けた。

佐藤博君が白山に逃れた後、村上国治氏は私があれほど念を押した彼との連絡を頻繁にとることをしなかったため、佐藤博君は勝手に枝幸の鯉場にヤン衆として流れて行き、遂に連絡が途切れてしまった。その後、佐藤君は鯉場の仕事がなくなったために千歳に戻っているところを細胞の同志に見えられ、九月になってやっと組織によって足寄に匿われたのである。射殺実行犯を匿うというには、あまりにも杜撰で無責任なやり方といわざるを得ない。

私は七月から十勝委員会に転任していたが、選挙活動のために足寄の山奥の柏倉部落に行くとき、そこに農作業をしている佐藤君の姿を見つけ驚いた。彼は「皆は選挙活動しているのに俺は農作業をさせられている。俺にも選挙活動に参加させてくれ」と私に訴えたが、私は「表に出ないで農作業を続けるように」と諭した。一〇月一日に村上国治氏が逮捕されたため、北海道地方委員会は急ぎよ佐藤博君を足寄から東京へ逃亡させることになり、一〇月上旬の朝早くに東京へと発ったのである。

この間、吉田四郎氏からは白鳥事件について何の話も指示もなく、私の事件に関する文書による報告にも全く回答がなかった。更に、村上国治氏に対する批判も吉田氏から直接に聞かされたことはなかった。事件後の処理と対策は吉田氏と村上氏の間で密かに進められ、北海道地方委員会内で組織的に事件についての思想的総括も対策も行われなかった。繰り返すが、軍事部にいた私は白鳥事件に関し一度も意見を聞かれず、また報告も求められることもなかったのである。

八月に開かれた党の北海道地方委員会の幹部学習会に私も参加した。



私はこの学習会の中で白鳥事件、旭川火災瓶事件（七月二四日）、小樽火災瓶事件（七月一五日）等について、党内で自己批判することを提起したが、吉田四郎氏に反対され罵倒されただけで終わった。だがこの学習会の席上、吉田四郎氏は「軍事方針の偏向問題では、札幌における白鳥事件は吹田事件に比べて問題にならないほどである」と述べ、さらに「札幌の闘争は石炭闘争までは非常に優れた方向に向かいつつあったが、それに慢心して白鳥事件という愚にもつかないことをやってしまつて、その偏向は未だに克服できないでいる」と、事件が党の犯行であることを事実上認めていたのである。この会議は私が知る限り、白鳥事件について正式に公然と討論された最初で最後の会議であつた。この会議終了の直後、札幌委員会副委員長の佐藤直道氏が逮捕され、その一ヵ月後には村上国治氏が公然の選挙活動中に党の合法事務所の近くで逮捕された。

私は事件発生前に計画を知り白鳥警部襲撃の中止を建議したが、事件を防ぐには至らなかった。私は党内での極左の誤りに対する自己批判と、党の組織防衛が必要だと考えていたが、党として事件全体に對しどう対処するかは明らかにされることはなかった。

この頃の私は、吉田四郎氏の指示でひき起こされた極左方針の「吉田首相迎撃闘争」、いわゆる旭川火災瓶事件によつて壊滅状態に陥つた十勝党組織の再建に専念していた。

## 二、東京への配置転換または一度目の追放

一九五三（昭和二八）年八月、私は北海道から東京に配置転換になつた。上京直後から党東京都委員会ビューロに入り、東京の党活動に参加

した。翌一九五四年の初冬に妻の栄子が札幌の義姉初子さんに連れられて北海道から突然東京にやつてきた。それもあの時代に飛行機に乗つてやつて来たのである。資金の苦しい党がなぜ大金をはたいて飛行機を使つてまで妻を北海道から送り出したのか？当時、私には解けないナゾであつた。

一九五五（昭和三〇）年四月、党は七月に開催される六全協にそなえ、活動方針を全面的に合法活動に切り替えた。しかし私は「白鳥事件」関係者として非公然のまま待機することになった。

六全協後は北海道から東京に来ていた北海道出身の荒井英二氏、阿部徹志氏を始め全ての幹部が北海道に戻り、東京に残されたのは私達夫婦二人だけになった。七月の六全協直後に党中央統制委員会の酒井定吉氏から中国行きを命じられ、「このことは妻にも言つてはならない」、そして妻については「東京に残し故郷には帰さない」と言われた。この時、妻を飛行機で東京に送つて来たのは、吉田四郎と党中央によつて私達を故郷に帰さないことを早くから決めていたことがようやく理解できた。

一月に党の中央統制委員会の梶田茂穂氏と党道委員会の村上由氏が私を呼び出した。梶田氏は「党中央としては真実を明らかにし、事実を把握する必要がある。事実を確認して欲しい。党内の極少数の関係者以外には確認された内容を漏らさない」という。村上由氏は「北海道の党としては事実を明らかにする事が第一だ。そうでないと、この『事件』の対策も立てようもないし原則的な闘争も出来ない」という。そこで私は彼らが持ち込んだ事件に関する膨大な検事調書等を三日間で読まされ、事件の真相についての確認を求められた。私は「高安君らの供述内容は私が事件関係者から聞いていた事実と基本的に一致している」と伝え、同時に、現在は党が完全合法化の情勢にあるのだから、党の責任

において事件関係者を保護すべきだと訴えた。

私は梶田氏と村上氏に事件の真相を要約し、「白鳥事件は日本共産党の五一年綱領の軍事方針に基づき、札幌委員会の責任者村上国治氏が計画し、穴戸均君が具体的に指導した中核自衛隊の武装闘争である。また事件に参加した中核自衛隊員は鶴田倫也、佐藤博、高安知彦、大林昇、門脇成、村手宏光である」と伝えた。つまり、当時の党中央委員会も党北海道委員会も白鳥事件の真相を正確に把握していたのである。

また調書の中には私の名が何度か出てくるが、私の役割は当然にも事件に直接関係はしていない。従って、私は中国に亡命する必要はないと主張した。この件について梶田氏と私は何度かの話し合いをもったが、最後に梶田氏は「党の組織から離れるなら中国に行かず、日本に残っても良い」と言うので、私は「党を離れても日本に残る」と答えた。

### 三．中国への亡命または二度目の追放

一九五六年三月に私は梶田茂穂氏から突然中国行きを言い渡された。梶田氏からは「北京では責任者に会って仕事をしてもらう。仕事が終われば二、三年で帰れるので奥さんも一緒に帰ってもらう」と言われた。私達夫婦は一九五六年三月、静岡県焼津港で第一勝漁丸に乗船して出港し、土佐清水港に寄港してから上海の呉松港に着いた。この時私達に同行したのは鶴田倫也君、大林昇君、桂川良伸君の三人である。

北京に着くと直ぐに、日本共産党中央委員会北京代表部の羅明（ろーみん）氏等による査問と吊し上げが始まった。党の責任者で日本共産党中央委員会駐北京代表の袴田里見氏は私に会い来ることもなく、査問の結果も知らずに私は人民大学分校（元日本共産党の幹部養成学校）に

送られた。

学校に着いた翌日、中国人校長の連貫氏（中共中央対外聯絡部副部長）から、「中国に長期に滞在してもらうことになる。日本の情勢に基本的な変化がある時、つまり日本共産党が権力を取ったような時まで帰国はできない」と宣告された。私達が入校してから一年後にこの学校は解散され、在校の日本人は帰国の準備のために中国各地に送られた。私達夫婦は学校の責任者から、当時外国人があまり来ない四川に行くように言われ、重慶に送られた。

その後、日本国内では「白鳥事件」は村上国治の無罪を勝ち取る裁判闘争として進められ、事件は敵の謀略とデッチ上げによる冤罪であるとして、真相を覆い隠し人々を騙し欺き続けたのである。

### 四．日本共産党四川支部

四川について以後、私は中国で長期にいかんにか生きていくかを生活の重点に置き、将来の帰国に備えた。

私は重慶の中共中央第七中級党学校に送られ、その後、私は田一民、妻は李蓮英という中国名で帰国するまでの生活を送ることになった。穴戸君は同じ党校で中国名を楊達として共に生活を送ることになった。

この時に一緒に党校に行った事件関係者以外の日本共産党員は工藤晃氏、秋山良照氏、小松豊吉氏等の他三名であり、彼らは一九五八年に白山丸で帰国した。この時四川にいた日本から来た日本共産党員と、中国で入党し彼らと結婚した女性党員ら二〇〇名以上が白山丸で帰国した後、事件関係者と極少数の党員しか残らなかった。

私達事件関係者は、川口孝夫、川口栄子、穴戸均、佐藤博、斎藤和夫、

門脇成、桂川良伸の七名は重慶に、鶴田倫也、大林昇、植野光彦の三名は成都に残った。十人は党員ではあるが組織生活はなく、お互いに交流し助け合っていたが組織の規律もなくそれぞれがばらばらな生活を送っていた。一九五八年八月に重慶の中共中央第七中級党学校と成都の中共四川省党学校が合併して成都に移ることになり、それに伴って川口孝夫、川口栄子、宍戸均は成都の省党学校に移った。

一九六二年に私達は日本共産党中央委員会の駐北京代表羅明氏に要求し、六年ぶりに北京に出ることができた。

その時、北京で羅明氏から日本共産党中央委員会の指示と許可が伝えられた。

一、四川にいる事件関係者十人は日本共産党四川支部を結成し、川口孝夫が支部長に就くことを許可する。

二、独自の党員は中国人女性との結婚を認める。それは中国共産党が同意し、許可したものである。

三、それぞれの任務を決定した。鶴田倫也、宍戸均、桂川良伸、門脇成、大林昇の五名は四川外語学院で英語とフランス語を学び、将来党の国際関係の仕事をする。一年後には大林と門脇が党中央の指示でベトナムのハノイ放送局に派遣された。

川口孝夫と佐藤博は党校に在籍のまま成都市近郊の彭県に行き、農村の工作に参加しながら政治工作を経験する。川口栄子、斎藤和夫、植野光彦は党校に残り健康を回復し、マルクス・レーニン主義の理論を学ぶことが党中央の指示で決定された。

この後、鶴田、宍戸、佐藤、植野、桂川の五名は中国の女性と結婚した。門脇と大林はハノイで日本共産党が東京から派遣した日共の女性党員と結婚した。

白鳥事件関係者として中国に送られた十名の内五名は六全協前に送られ、五名は六全協後の統一した日本共産党によって送られた。一九五五年七月の六全協後、宮本顕治の指導する日本共産党中央委員会は私達を中国共産党に委託し、日本への帰国を禁止して四川省に隠匿したのである。そして事件関係者は日本共産党中央委員会駐北京代表によつて生活、任務、学習まで全て管理、監督されていた。

一九六六年に入り中国は毛沢東が発動した文化大革命に突入した。

一九六六年三月二日～二七日に日中両党の会談が持たれ、共同コミニケ草案に合意した。ところが、三月二八日～二九日に上海で行われた毛沢東と宮本顕治の会談の席上、毛沢東が反米反ソの統一戦線を主張し、北京で合意した共同コミニケ草案は破棄された。その結果、日中両党が喧嘩別れとなり両党の友党関係は解消された。

四川支部の指導部三人（川口孝夫、鶴田倫也、川口栄子）は一九六六年六月に、当時の日本共産党中央委員会駐北京代表で中央委員の砂間一良に呼ばれて北京に出た。砂間は四川支部の指導部に上海会談の状況を伝え日本共産党を支持することを要求した。三人は態度を保留し、「四川に戻り支部総会を開き態度を決める」と砂間代表に告げて四川に戻った。四川支部の総会では全員一致で中国共産党の観点到同意し、日本共産党の観点に反対することを決議した。

その後、指導部の三人は再び北京に赴き、砂間に四川支部の全員が北京に来ることを要求して実現した。

砂間氏と四川支部は日本共産党の十回大会の草案を基礎に論争し討論したが、意見は対立したまま一致することはなかった。このときの主な対立点はソ連をどうみるかであった。我々は中国共産党の見解に沿って、ソ連はすでに社会帝国主義に変質し、アメリカ帝国主義とともに打

倒の対象であると主張したのに対し、砂間氏はソ連も反帝国際統一戦線の有力な一員であることを主張した。最後に砂間氏の意見に基づき、四川支部が意見書を書き上げ、砂間氏が責任を持って日本共産党十回大会に提出することで落ち着いた。大会では不破哲三氏が在外支部の意見として我々を教条主義、事大主義と批判した（一九六六年一月二八日付「赤旗」に掲載）。大会後北京に戻った砂間氏は私達にこのことを報告した。

一〇回大会では中央委員の西沢隆二氏、赤旗ベルリン特派員だった金沢幸雄氏、ハノイ駐在特派員だった井出潤一郎氏他多数の中国共産党の路線を支持する党員が除名された。しかし私達日本共産党四川支部は除名されることなく、一九六七年八月に砂間氏が北京を離れるまで、日本共産党中央委員会駐北京代表、砂間一良書記局員の指導の下に活動していたのである。つまり中国に亡命させられた事件関係者十名は、事件が発生した時も日本共産党の党員であり、六全協後の統一した宮本時代にあっても変わらず日本共産党員として共産党中央によって直接に指導管理されていたのである。

その後も私達は日本共産党から正式な除名通知を受け取っていない。

## 五 一八年ぶりの日本の土

一九六六年三月の上海会談で毛沢東と宮本顕治が喧嘩し、日本共産党と中国共産党の関係が決定的に対立したことにより、日共が中共に委託していた私達の帰国を禁止する委託協約も廃棄され、ここに私達の帰国の可能性が生まれることになった。

この時から私は日本に帰ることを生活の主要な目標にして、帰国計

画を練り上げた。計画では第一に合法的に帰国すること。そして事件の核心から遠い者より順に帰国するというものであった。だがこの計画は、一九六七年四月に文化大革命の影響を受けた四川支部の仲間から謂れ無き批判と抑圧を受け、「反革命」として打倒されたために私の発言権は奪われ実行不可能になってしまった。私は根拠無き批判や吊るし上げに怒りを持ち、彼らと別れて帰国しようと思ったが、皆で力を合わせ帰国しようと思えば我慢して行動を共にした。私が四川支部の中で政治的な自由を回復したのは一九七〇年になってからである。

一九七二年九月、日本と中国との間に国交が回復し北京に日本大使館が開設された。このことは、私達が合法的に帰国する条件が整ったことを意味した。帰国実現に向け大きな前進であった。

私達は中共中央対外聯絡部の仲介で、宮本指導部の共産党から分裂した日本共産党（左派）に帰国の援助を依頼し、彼らの同意を得た。一九七三年一月には日中友好協会（正統）事務局長の三好一さんが川口孝夫、川口栄子、桂川良伸の戸籍抄本を持って北京へ迎えに来てくれた。更に三好一さんが三人に同行して北京の日本大使館に赴き、帰国の申請手続きを済ませた。その日のうちに「帰国の為の渡航書」が発給されたことは、思いもよらぬ誤算であった。これで私達三人が帰国する道が開かれた。

帰国のためいよいよ成都を離れるという前夜、佐藤博君がお別れに来てくれた。彼は私の手を固く握りしめ、しばらく離さなかった。彼の境遇と帰国条件の難しさを考えると私には胸に迫るものがあつた。そして必ず迎えに来ると心に誓った。この時私は帰国後の自分の最も主要な任務を事件関係者の全てを帰国させることだと心に決めた。

一九七三年二月一三日、天津を出航した聖山丸は九州の若松港に



着岸した。川口孝夫、川口栄子、桂川良伸の三人は一八年ぶりに故国の地を踏みしめたのである。

私たちは日本に向かう船の中で、上陸後逮捕される事態を覚悟していたが、杞憂に終わった。下船して岩壁に立った時、妻の栄子がしみじみと「やつと生きて帰って来られた…」と静かにつぶやいた。口には出さなかったが、私も栄子と同じ想いであつた。そして一八年わたる中国での生活の思い出が、走馬灯のように駆け巡った。

① 一九五七年七月、重慶の党学校に着くと中共の整風運動は反右派闘争の段階に入っていた。まだ中国語も聞き取れない私だつたがこの運動に参加した。

初めは「知る事は全て言い、言うことは言い尽くし、言う者に罪はなく、聞く者は戒めとし、有ればこれを改め、無ければ更に努力する」との原則で、党内外の人々に自由に発言させた。しかし、一転して善意から真摯に発言した多くの人々の言論を取り上げ、これを右派言論として弾圧した。これが反右派闘争である。

これに懲りて党の内外では、「党に騙された」と思い、党員も党外の人々も『物言えば唇寒し、秋の風』の感じで、心の中の思いは語らなくなった。「反右派闘争の結果は五五万二千余りが右派分子にされ、人民の敵にされ、弾圧された。そのうち誤って右派にされた者は五三万三千余で九八%であつた。全くのデッチ上げによる冤罪であつた。右派ではないが右派言論の罪で「懲罰」で下放され農村に追いやられた党員と幹部は一三〇万人に及んだ」(『共和国十大冤案之謎』中文一九六一―一九七ページより)という。

これで中国のインテリの口は封じられ、人民は口を閉ざして本心を語らなくなった。私の周囲でも、教研室の李主任と哲学教研室の

韓主任が右派にされ、その子供たちも一夜を境にして反革命分子の子供になってしまった(文革後、李主任と韓主任は名誉を回復した)。この状況を目の当たりにして私の頭は混乱した。

この時全国で五五万近くの幹部が誤って右派にされたが、それによつて数百万人のその家族も反革命右派の家族として悲惨な目にあつたのである。

② 一九五八年に入ると大躍進が始まつた。八月の「人民公社はすばらしい!」という毛沢東の一言によつて、人民公社を作る動きが全国で「台風」のように吹き荒れたのである。

私は村の農業合作社に行つてから三日目に郷政府に呼び戻され、翌日、中興人民公社の設立祝賀大会に参加した。五つの郷を合体して作つた公社である。と言つても、農民も合作社の幹部も訳のわからないうちに、あつという間にできた人民公社である。スローガンは「先ず骨組みから建てる」というものであつたが、その先がなかなか続かない。

そのうちに二メートルもの深耕の畑が宣伝されるようになった。さらに一畝(ムー)の田に四畝分の黄色に実つた稲を移植し、一畝で一万斤の生産を達成したといつてデッチ上げる。地域の党委員会が、農民は三日間寝ずに稲刈りせよとの号令を下す。農村には公共食堂が作られ、「飯は金いらす」になり、「公共食堂は共產主義の芽だ」と褒め称える。しかし半年も過ぎると飯を炊く薪すらもなくなり、野菜も欠乏しはじめた。減茶苦茶である。

翌年の彭県の農業生産計画会議では、豊作だつた五八年の小麦の一畝当たりの生産量が一二六キロだつたにもかかわらず、ある幹部は一畝五・〇〇〇キロのスローガンを提起して革命的だと称えられ

た。このような浮ついた風潮の中で、「どんなに努力しても二〇〇キロが限度」と主張した真面目な幹部は、批判され吊るし上げられたのである。

もちろん現場を知る農民は、こんなデタラメな生産目標が達成されるなどとは思ってもいない。結果は生産がガタ落ちし、彭県の一九六〇年の小麦の生産量は、県平均で一畝当たり九〇キロにまで落ちこんだのである。当然にも厳しい食料不足が起きて、人々は栄養不足のために浮腫になり、餓死者が出る始末であった。

三日間寝ずに稲刈りをやらされた時のことである。二日目になるとさすがに農民は疲れてしまい、田圃に手をつけて眠ってしまった。私の友人の李さんは、この農民の悲惨な状態に同情し、夜は稲刈りを休んで家で寝ることを許可した。農民は大喜びである。しかし農民を助けたこの李さんは、党の決定と統一指導に違反したとして、後に規律違反で党から処分された。

③ 大躍進、人民公社運動の中で現れた極左のデタラメな指導は人民大衆の不満と批判を引き起こし労働意欲も著しく減退した。この事態を打開するため、一九五九年七月から八月にかけて廬山で中国共産党中央委員会が開かれた。

会議では彭徳懐が毛沢東に手紙を書き、極左の指導の誤りを是正するよう提起した。この時の彭徳懐の諫言は全く正しく、多くの人民の感情・意見を代表していた。これに対して毛沢東は、彭徳懐の意見は「右の誤りで、党内のブルジョア思想だ」と批判し、さらに彭徳懐、張聞天、黄克誠、周小舟の四人を反党右翼日和見分子と断じ、ありもしない四人の反党「軍事クラブ」をデッチ上げて、彭徳懐らの真摯な提言に応じたのである。

結局、廬山会議によつては極左の方針は改められることがなかった。それどころか、その後も一層極左を押し進め、全国的に反右翼日和見主義の闘争を展開したのである。「その結果は全国で人民の立場にたつて極左の方針に反対する党员と幹部三〇〇万人以上が批判され処罰された」（李銳『毛沢東の早年与晩年』二五二ページ参照）。

この時私の知っている党のある支部書記は、極左の方針を執行せず、その村からは一人の餓死者も出さなかった。しかし、廬山会議の後の反右翼日和見主義の闘争の中で、党の方針を実行しなかったとして批判され処分された。逆に極左の方針を忠実に実行して餓死者を出した幹部は、誉められて抜擢され出世したのである。私はこのことを一生忘れれることはできない。

④ 一九六二年になると劉少奇、周恩來、陳雲、鄧小平等は、調整を主に「調整、強固、充実、提高」の八字方針を提起した。七千人大会が開かれ、その場で毛沢東も自らの誤りを「自己批判」した。極左の指導方法が是正された結果、食料事情も好転し人民の生活も安定し始めた。

しかしこの安定も長くは続かなかった。毛沢東は再び階級闘争を要とする極左の「四清」運動を開始したのである。理由は打倒された地主や富農等の階級が復活し、報復のために活動しているという。毛沢東の言葉を借りると、「現在、わが国のおよそ三分の一の権力は敵または敵の同調者の手に握られている。われわれは一五年やってきて、天下を三分し、その三分の二を握るようになっただけである」。

こうして階級敵を探す運動が進められ、全国の農村、都市で「四

清（清理帳目・清理倉庫・清理財物・清理工分）」運動が展開された。またまた幹部は批判され、吊るし上げられた。生産は上がらず、社会は恐怖と不安に包まれた。

一九六四年の暮れに「二三ヶ条の方針」が出され、一時は闘争がゆるめられたのだが、この「二三ヶ条の方針」の中には来る「文化大革命」の伏線がしかれていた。つまり「今回の運動の重点は、党内の資本主義の道を歩む実権派を一掃することである」との一句が入っているのだが、これは「文革」で劉小奇をはじめ九〇%の党員、幹部を打倒するための隠れた方針であった。

当時、私は彭県の国営農場の半農半読の技術学校で哲学の講義をしていた。「中国の現在の主要な矛盾は階級矛盾であり、各村では先ず階級矛盾を探すことだ。それなしに一切の分析は始まらない」と言って教えていた。そして、それぞれ自分の村の分析を行った。その時、十五才の女の子が立ち上がり、「先生、私の村は分析できない。私の村には地主も富農も反革命もないし、破壊分子も右派分子もない。階級闘争もないし、主要な矛盾もないので分析ができない」と訴えた。毛沢東の「一が分かれて二になる」の哲学の教条主義者だった私は、この子の訴えに困惑してしまった。

⑤ 一九六六年になると「文化大革命」の嵐が全国で吹荒れた。紅衛兵が現れ、毛沢東がこれを支持し、自ら「ブルジョア司令部を砲撃せよ！」の大字報を書いて劉少奇打倒を呼びかけた。

毛沢東に対する個人崇拜で洗脳された紅衛兵は全国を走り回り、文化遺産や老舗の看板まで破壊し暴れ回った。解放軍内の党組織を除いて、党の組織活動は停止した。

次に「二月暴風」の上海を皮切りに、全国的に奪権闘争が吹き荒

れて全国の幹部のほとんどが打倒され、反革命分子として弾圧された。私はそのすぐ後の四月に、上海で一日にわたって張春橋、桃文元から直接説明を聞かされたが、何がなんだかよくわからなかった。

上海から北京に戻るとすぐに、私も日共四川支部の中で仲間に打倒され反革命として批判された。中国革命の中で命を懸けて戦ってきた幹部が、何の根拠もなしに反革命として打倒される。私も同じに打倒され反革命にされた。私はこの時に「私は反革命をやったことがない。それは絶対にないことだ！」と考えた。そしてまた、中国のほとんどの幹部、党員が反革命であれば、そもそも中国革命が成功するわけがない。ここで私はようやく、毛沢東の起した「文化大革命」はおかしい間違っている、との疑問を抱くようになった。それ以前には、毛沢東は正しいが下部の幹部、党員が誤っていると思っていた。しかし間違った指導をした幹部や党員までもが打倒されてしまい、毛沢東の直接指導の下、四人組や林彪たちのグループだけが残っているだけになった。

次に造反派と紅衛兵が共に二派に分かれ武闘を始めた。小銃、機関銃に大砲まで持ち出して戦った。まさしく戦争である。

そして生産は落ち、食料不足になって生活は苦しくなった。山東省から四川省まで乞食が流れてきた。社会状態は乱れ、銀行強盗や追剥に強姦などが出現した。町にはチンピラやヤクザが匕首を持って群れをなして抗争を繰り返す。そのチンピラを縛り上げトラックに載せて町を引き回して見せしめにしたが、効果は全然なかった。

一九六九年に開かれた中共の九回大会からは党組織の再建が進められた。しかし人民大衆は冷ややかで意欲も湧かず、その結果生産も上がらず、生活は苦しくなるばかりだった。そのうちに「中央

文革小組」小組長の陳伯達が反革命の嫌疑で毛沢東に首にされ、次いで「九回大会」で毛沢東の後継者とされていた林彪が反革命クーデターを計画し、それが発覚して逃亡途中のモンゴルで墜落死した。林彪事件後、武闘の責任追及が始まった。武闘と内戦を挑発した江青は、その責任を大衆に転嫁し、「階級隊伍」の整理を口実に造反派を含めて大衆への弾圧を始めた。

このような事態の進展を、労働者、農民、学生は、苦しみと怒りを胸の奥に秘め、醒めた目で見ていた。「職場の学習会」でも参加者は沈黙して発言する者もなく、党幹部だけが一方的に話して終了するというありさまであった。

この時私のいた「紅旗柴油機廠」では野菜はほとんどなく、肉も油も遅配や欠配で生活水準は最低であった。だが工場の門前には毎日自由市場ができ、そこには新鮮な野菜がふんだんにあるだけでなく、豚肉、生きた鶏、家鴨、犬、猫、蛙、どじょう、蛇など何でも売られていた。しかし値段は高いため労働者にはなかなか買えなかった。

警察は毎日取り締まりに来るのだが、百姓は警察が来ると逃げ散り、いなくなると出てきては品物を並べる。いたちごっこである。しかし違法とは知っていても、この市場で買わないと間違いなく栄養不良になってしまう。政府の政策の誤りを百姓と労働者が自力で正しているのである。共産党よりも人民の方が現実の生活に合わせて正しく解決するのだ。そうでないと生きていけないから必死である。

このような中国を後にして私たち夫婦は若松港に着いたのであった。妻の栄子がその時に漏らした一言、「やつと生きて帰って来

られた。」は、私たちの心の底から出た言葉であった。そしてこの一言の裏には一生忘れる事のできない中国の生活と懐かしい人々への想いがあつた。一八年間、苦楽を共にしてきた懐かしい友の一人一人の顔が目浮かび、みんな元気で生きてほしいとの想いがこみ上げてきた。

一九七五年五月には植野光彦君が帰国し、一九七五年二月二六日に斎藤和夫氏が帰国した。これで事件関係者の五名が帰国した。

中国には四川に佐藤博君、穴戸均君、鶴田倫也君の三名が、更に北京には大林昇君、門脇茂君の二名が残った。

## 六．帰国工作から排除される

一九七五年に北京に居た大林昇氏と門脇茂氏から日本共産党（左派）の関東派政治局に手紙が届いた。内容の要点は「川口は警察権力に通ずる危険があり、今後は彼らの帰国問題からはずせ」というものであった。関東派政治局は新宿区市ヶ谷台町の事務所で政治局の秘密会議を開いた。参加者は政治局員の五名、隅岡隆春、本田富蔵、渡辺登、室井健二、川口孝夫、それに中央委員の三好一氏が特別にオブザーバー参加した。会議では北京からの提案に対し、私と三好一氏は反対し、他の四人は賛成。私を事件関係者の帰国問題からはずすことを決議した。この決議は政治局内だけの秘密とされ、関東派の中央委員にも知らなかった。会議の席上、三好一氏は断固として反対したが彼には投票権がなかった。私は根拠のない不当な決議によって排除され憤慨したが、会議後に三好さんから「全員の帰国のために我慢して耐えるように」と真心から忠告



され怒りを抑えた。

この会議の数日後、関東派政治局の室井健二、渡辺登の両氏が札幌に来て、桂川良伸、植野光彦、鈴木時雄（当時関東派北海道委員会の副責任者）の三氏に私も参加して秘密会議が開かれ、室井、渡辺の二氏から関東派政治局の秘密決議の内容が伝えられた。桂川、植野、鈴木の三氏は決議に賛成した。そして今後は帰国関係の責任者を桂川氏と決め、私を事件関係者の帰国問題にタッチさせないと決定した。

一九七七年に門脇成君、翌年には大林昇君が帰国したが、関東派政治局は札幌での彼らの支援活動を全く行なわなかった。そのため二人が札幌に護送されてからは、私が責任を持って弁護士への依頼、弁護士料のカンパ、支援者のオルグ等の支援活動を組織せざるを得なかった。私は関東派政治局によって二人の支援活動から排除されていたが、彼らの帰国を自己の任務と考えて無条件で援助をした。この時、横路民雄弁護士に多大な迷惑かけ、お世話になったことは終世忘れられない。

## 七、「白鳥裁判運動」と日本共産党の逃亡

私が帰国した一九七三年一二月には、村上国治氏は既に釈放されており最後の再審請求を求めて闘争していた。

当時、私の周囲にいた殆ど全ての人々が「白鳥事件」は敵の挑発とデッチ上げによる冤罪であり、村上国治氏は無罪であると信じていた。余談だが、一九七四年二月二六日、東京の武道館で開催された「農民春闘二・二六中央集会」で偶然に村上国治氏に出会ったが、彼は時間が無いといって逃げるように私の前から去っていった。

日本共産党は国民救援会の中に「白鳥事件中央対策協議会」を組織し、

白鳥裁判運動を大々的に展開して村上無実の宣伝を繰り広げていた。日共は松本清張、佐野洋、山田清三郎、宇野重吉等の文化人を総動員し、小説、戯曲、映画、講演などを通じて事件の真相を覆い隠すための宣伝を行なっていた。地方議会の白鳥事件再審要求決議は一五〇余の市町村、特別区議会におよび、再審要求の署名は一四〇万人を越えたといわれている。自由法曹団、共産党の弁護士を中心に三〇〇名ともいわれる大弁護士団を結成して偽りの「村上国治無罪」の裁判闘争を展開したのである。だが最後は客観的な歴史の真実の前に破れ敗北した。一九七五年五月二〇日、最高裁第一法廷は特別抗告棄却決定を下した。

一九七五年七月八日、「白鳥事件中央対策協議会」の拡大幹事会は白鳥運動終結宣言を決定した。

同年七月二六日、港区新橋の平和と労働会館ホールで中央白対協主催の「白鳥裁判運動終結全国代表者会議」が開かれ、白鳥裁判運動の「終結宣言」が発表された。白鳥事件中央対策協議会は解散宣言を発表し、各地にあった白対協も順次解散した。

そして日共の全ての党史から白鳥事件も白鳥裁判も消しさられた。一九八〇年出版の『日本共産党の六十年』には白鳥事件については全く触れられていない。『日本共産党の六十五年』、『日本共産党の七十年』の年表では、社会欄の一九五二年の項にただ一言「一月二十一日 白鳥事件」としか書かれていないのである。

現在日本共産党中央は「白鳥事件は党が分裂していた時に、他の分派がやったことで今の党には関係がない」、「五一年、五二年の活動は今の党とは関係なく党史にはない」などとうそぶいているが、歴史を否定した全く恥知らずな言動である。では何故「白鳥事件対策協議会」を中央、地方に組織し、白鳥裁判運動という全国的運動を立ち上げたのか？

救援活動は何だったのか？彼らの言い分は全く矛盾している。日本共産党は国民に謝罪しなければならないはずだ。

昨年（二〇〇二年）は白鳥事件発生から五〇年目にあたる。この節目の年に白鳥事件も白鳥裁判も党史から消し去り捨て去った日本共産党の人々が、国民救援会の名目で白鳥事件の集会を開いた。

六月一五日には札幌で集会を開き、作家の佐野洋氏が講演を行っている。更に十一月一六日には、佐野洋氏、都立大学名誉教授の塩田庄兵衛氏、俳優の日色ともえ氏、衆議院議員の松本善明氏らが呼びかけ人となり、東京で「白鳥事件五〇周年・村上国治さんを偲ぶ交流のつどい」が開かれた。弁護士の上田誠吉氏、共産党参議院議員の緒方靖夫氏等も参加している。彼らは真実に背き嘘と偽りで作り上げた「村上国治無罪」の既に敗北した破れ旗の下に懲りもせず集まったのである。

日本共産党中央委員会の中核指導部は、事件発生から六全協で党が統一した後も「白鳥事件」の真相を知っていた。白鳥事件は五一年綱領の軍事方針に基づき党の札幌委員会の責任者、村上国治氏が計画指導し、穴戸均氏が具体的に指導して、中核自衛隊員の鶴田倫也、佐藤博、大林昇、高安知彦、門脇成、村手宏光らの諸氏が参加して実行されたのである。

私は一九五二年三月に來道した中央軍事部の同志に真相を報告している。また同年四月に中央軍事部に呼ばれて上京した際、当時中央軍事部にいた山本俊美氏と前記の軍事部の同志に白鳥事件後の北海道の党内状況を報告した。更に前述したように私は、一九五五年一月に中央統制委員会の梶田茂穂氏と北海道委員会の村上由氏に私の知る「白鳥事件」のすべてを報告している。日本共産党の最高指導部は以上の事実を知った上で、嘘で作り上げた「村上無罪」で多くの人々を欺き裁判闘争を展開し、組織防衛のために白対協を組織したのである。

既に事件発生から五〇周年を過ぎようとしている。日本共産党も八〇年の歴史を持つ公党であり、人民の利益を守ることを宣言している。真に人民の立場に立つ政党であるならば自己の誤りを率直に認め、自己批判をするべきである。そうしてこそ日本共産党は日本人民の真の信頼を勝ち取ることができるとは思えない。今からでも遅くはない。日本共産党は自己批判をすべきである。これ以上偽りを続けてはならない。

#### 八・佐藤博、穴戸均両君の死と鶴田君の帰国問題

白鳥裁判は終わり、党は我関せずと「白鳥事件」に対し頬かむりした。北京に残っていた三人のうち、佐藤博君と穴戸均君が一九八八年の初めに相次いで亡くなった。佐藤君の葬儀には札幌から桂川良伸氏が参列した。残るのは鶴田倫也君一人となった。一九八七年に私達夫婦は四川省成都市を訪問し、その帰途に北京に寄り三人に会った。この時、穴戸君は肝臓癌の末期だった。彼は自分のカルテを見て自分の病名を理解していた。しかし、あたかも悟りを開いたような澄んだ思想で淡々と語っていた。佐藤君は病名を告知はされていなかったが、私達夫婦の前で明るく振る舞い穴戸君の病状を心配していた。佐藤君は自分の病氣（肺癌）についてしっかりと把握していたと思われる。鶴田倫也君は病氣の二人を親身になって心から世話をしていた。その夜、私はホテルに戻ってから彼ら二人のことを思い、知り合ってから三五年の交流を振り返り、悲しきで涙が溢れて止まらなかった。

亡くなった二人のことを日本で公開し、公然と迎えるにはどうするか。後日、私は鶴田君にお願ひして彼ら二人の最後の闘病生活について書いてもらった。折に触れて何度も読み返しているが、いまでも涙なく

して読むことはできない。

更にまた鶴田君の帰国をどう実現するのか、新しく考えなければならぬ問題であった。

同時に事件の真相を明らかにし、日本共産党によって歪曲された歴史の偽りをいかに正すか、この二つの問題を真剣に考えていた時であった。

一九九六年九月に私は妻栄子、斎藤孝君と四川を訪れ、帰りに北京で鶴田倫也君に会った。

この時、北京観光中の乗用車の中で、鶴田君が突如白鳥事件の真相の一部（犯行に使われた自転車の出所、事件後の拳銃の処分）を斎藤君、栄子たちに自ら進んで語ったのである。風邪でホテルに休んでいた私は栄子からこの話を聞き、鶴田君の予期しない話に驚いてしまった。何故なら彼が車中で語った内容は、彼と私との永い付き合いの中で一度も聞いたことのない内容だったのである。

私はこの話を聞いて、上記の二つの問題（鶴田倫也君の帰国と白鳥事件の真相の公開）を同時に解決する方法があると考えようになった。

一九九七年四月に私は斎藤孝君に同行して成都を訪れた。

斎藤君は鶴田君を成都に招待した。斎藤君は鶴田君と共に杜甫草堂に行き、一日かけて彼から白鳥事件の真相を詳細に聞いた。この場に私は参加していない。また斎藤君が帰国する際の記念写真撮影の時、鶴田君は何の躊躇もなく我々と一緒にカメラの前に収まった。過去にも彼と私は写真を撮る機会は数多くあったが、彼はいつもカメラマンの仕事に徹し、私達と並んで写真に収まったことは一度もなかった。斎藤君も振り向くと彼がいるので啞然としていた。この日の彼の行動は私を非常に驚かせたが、同時にもしかしたら彼は帰国の決意をしたのでないかと

思った。

私の成都訪問の目的は鶴田君と彼の帰国問題について研究し、相談することであった。斎藤君は仕事の関係で先に帰国したが、その後私と彼は一週間近く同室に宿泊し、帰国問題について時間をかけ色々話し合った。その時に二人で達した結論は、鶴田氏は公然と帰国すること、法廷で事件の真相を語ること、弁護士は国選弁護士とすること、であった。私は鶴田氏が自己の責任で日本の人民の前に真相を明らかにすることは事件解決の最良の方法だと思っていた。彼が事件の真相を明らかにすることは、とりもなおさず白鳥事件は日本共産党の『五一年綱領』とその軍事方針に基づき、村上国治氏が計画し、穴戸均氏が指導した中核自衛隊の武装闘争であった事実を明らかにすることである。私は鶴田氏が真実を明らかにすることは、日本人民に対する自己批判であると考えた。

そして私は彼の帰国の準備に入ることを決め、鶴田倫也氏と別れ帰国した。

ところが一九九七年六月に、時事通信の信太記者が北京の鶴田倫也氏の住居を突き止め、突撃取材を敢行してその内容の特ダネニュースとして日本に流した。日本政府の問い合せに中国政府は「鶴田倫也なる人物は中国にはいない」と発表した。それ以後、鶴田氏と私の連絡は途絶えてしまった。

同年の一二月に川口孝夫、川口栄子、斎藤孝が北京を訪れた。目的は鶴田氏と何とか連絡を取り、現状を理解し、彼と今後の方針と起こるべき問題を研究するためであった。しかし中共中央対外聯部を通じて連絡をとろうとしたが、鶴田氏からは何の連絡もなく、中聯部の古い友人と情報交換するに留まった。

## 九、李銳先生との出会い、そして私の自己批判

この北京訪問の時、私達夫婦は李銳先生に会うことができた。この年の春から私達二人が翻訳した李銳先生の巨作『芦山會議実録』の初訳原稿を李銳先生に渡し、受け取って頂いた。更に私達が永い中国の生活の中で未解決であった、中国共産党史の多くの問題について教えを頂き解決することができた。李銳先生が中国人民の利益を守り、毛沢東の誤りに正面から反対し、真理を堅持し闘争した勇氣に心から敬服した。同時に李銳先生の生き方は私に白鳥事件の真相を明らかにし、日本人民の前に日本共産党のいわゆる「村上無罪」の嘘とデッチ上げの誤りを明らかにする勇氣と決意を促した。私は李銳先生との会談によって「白鳥事件」について永い間曖昧であった私自身の認識を改めることができた。

私は一九五一年一二月の中旬に宍戸均君に誘われて石川正二郎、植野光彦の両君と数人の学生と一緒に幌見峠に拳銃の射撃訓練に同行した。目的は学生達に拳銃の射撃を経験させることであり、拳銃はブローニングであった。私は射撃には参加せず学生が事故を起こさないように注意していた。これ以後はそれまで毎日あった宍戸均君からの連絡が途絶え、党札幌委員会の軍事組織との連絡は取れなくなった。

前述のごとく、一九五二年一月一〇日頃と思うが私が北大の化学の教室に行くと、そこには宍戸均君、植野光彦君と共に三〇歳位の労働者風の男がいた。宍戸君と植野君に会うのは幌見峠の射撃訓練以来である。その場の空気は非常に緊張しており、いつもおしゃべりな宍戸君でさえも「こんにちは」と言ったり全く話をしない。そのような張り詰めた雰囲気耐えかねたかのように突然労働者風の男が、思いつめた顔をして

「白鳥をやったら浮くか浮かないか？」と切り出した。驚いて宍戸君を見ると彼はだまって頷いている。この時私は直感的に、札幌の党は白鳥を襲撃する計画を進めていることを察知し、「これは危ない」と思った。しかし私はその場の雰囲気に合わせて、「浮かないんじゃないの？」とこたえた。そして、村上国治君は私がこの計画に反対するであろうことを予期して、この計画そのものから私を排除したことを察したのである。

当時、党の地下活動の指導原則は上級から下級への単線指導が原則であり、上級の専門部は下級の委員会ビュロの指導には直接干渉はできなかった。従ってこの場合、殺害計画を止めさせることができるのは党の札幌ビュロキャップの村上国治君を直接指導している道党ビュロキャップの吉田四郎氏以外にはない。そこで私はその日のうちに吉田四郎氏と輪田一造氏に緊急レポを送った。内容は「札幌の党に白鳥殺害の計画があり、進行している。あなたは知っているかどうか？とにかく札幌の計画を直ぐに止めさせるように指導して欲しい。またこのレポを受け取ったら直ぐに返事を欲しい」というものであった。

この後両氏からは返事がなく、遂に一月二日事件が発生した。事件後も両名から返事はこなかった。このレポが吉田四郎氏に届いたかどうかはいまだに不明である。

事件の翌日に宍戸君に会うと、彼は「やった！うまくいった！」と小躍りしながら、私に事件の内容を話してくれた。この時に化学の教室で会った労働者風の男が佐藤博君であることを知らされた。

私は事件の計画を知った後、その場で彼らに反対せず、吉田四郎氏に報告して止めさせようとしたことは、地下活動の単線指導の組織原則に従った正しい処理であったと事件後五〇年間考えてきた。組織的には



それは正しいかも知れない。しかし今は、あの場で穴戸君達の計画に断固反対し、説得して阻止すべきであつたと思つてゐる。

中国にいた時に佐藤博君が私に、「あの時お前は浮かないと言つた！」と私に詰め寄つたことがあつた。これは私の思想的弱さの核心を突いた正しい指摘である。私の真意がどうであれ、あの時の私の一言が彼に、私が計画に同意していると思わせたとしてもそのことをもつて彼を責めるわけにはいかない。

当時の私には一人の人間として、また人民の利益の立場に立つて誤つた計画や行動に断固反対する思想と勇気が欠けていたのである。この私の思想の弱さと勇気のなさが、今まで「白鳥事件」の真相を公表することができなかった主要な原因であつた。

私が今になつて少しは勇氣を持つて、人民の利益の立場に立ち事件の真相を公表できるようになつたのは、人民の利益を最優先し、そのためには毛沢東に対してであつても「たとえ八つ裂きにされようとも、敢えて皇帝を馬から引きずりおろす」（毛沢東が好んだ言葉）を身をもつて実践し、誤りを真つ向から批判した李銳先生の思想と態度から教えられたものである。先生には心から感謝している。

# 一〇・鶴田君の心変わりと帰国者からの誹謗中傷

一九九八年三月に私は再び北京を訪れ、再度中聯部を通じて鶴田君に連絡を求めた。しかし北京についてから二〇日経つても鶴田君からの連絡はなく、明日帰国という日に中聯部経由で鶴田君からファックスの手紙が送られてきた。

「川口様…お手紙拝見しました。……。唐澤 明（鶴田倫也） 三月

三〇日」の日付である。

内容を要約すると以下の四点である。

斎藤氏は私の話した内容を書かないでほしい。

斎藤氏が前に提起したNHKに発表することは敵を利用するので反対である。

NHKと何かする時は大林、荻窪（門脇）、桂川とよく相談すべきだ。私が考えるに事件の真相を明らかにする時期は、例えば関係者の全てが死亡した後二〇年後か、又は事件発生の一〇〇年目とかが考えられる」。

という内容であつた。

私は二回も北京に連絡に来たが、鶴田君は私達に会わないばかりか、突き放して全く相談の余地もない。ファックスの中には前年成都で話し合つた帰国することについても全く触れられていなかった。これは彼が当面帰国しないという意志の表示であり、また私に対する縁切り状だと考えざるを得なかった。そこで私は事件の真相を自由に公表する決意をした。

鶴田君は当分帰国しないつもりだと理解した私は、一九九八年一〇月に以前から出版を準備していた『流されて蜀の国へ』を出版することにした。私は数年前にこの本の初稿ができると直ぐに北京の鶴田君に渡し、文中の誤りを指摘して欲しいとお願ひした。彼は懇切丁寧に原稿を読んで誤りを指摘してくれた。彼が指摘してくれた箇所は全て改めた。

但し終章の「私と『白鳥事件』」は出版の直前に補足した章であり、鶴田君は読んでいない。この中で私は「高安君らの供述内容は、私が『白鳥事件関係者』から聞いていた事実と基本的に一致している」と書いた。これは高安君の自白が真実であることを証明し、日本共産党の陰謀

によって「裏切り者」のレッテルを貼られた高安君の汚名を晴らすために書いたものである。

この真相の核心を突いた一文は、数人の事件関係者の私への怒りと攻撃を引き起こした。先ず一九九八年末から一九九九年始めに桂川良伸君が川口は裏切ったと怒り、私への人身攻撃の文章を書き、北海道、東京はもちろん北京にまでばらまいた。

翌二〇〇〇年六月には荻窪成（旧姓は門脇成）君が私への人身攻撃の文章を書き、この文章を日本と中国の私の知人に送りつけた。中国にいた時も文化大革命中に彼らから攻撃を受けていた私にとって、この文章は「また始まったか！」程度の受け止め方しかなかったが、絶対に許せないのは次の一文であった。荻窪氏はこともあろうに、白鳥警部の行動調査を供にした同じ北大細胞員で中核自衛隊員の高安知彦氏に關し、「……高安証言が真つ赤なウソであることは火を見るより明らかであるからである。そして、この高安の偽証を大前提として、さらに局所的な状況証拠を都合よく組み合わせ、村上氏など、容疑者とされた数人の組織的犯行ときめつけられたのである。この全くありえない大前提が高安により偽証されたことは、権力の前に膝を屈した証人が警察当局の創作した筋書きに誘導されて証言したことを物語っている。」などと書き連ねているのである。

事件の真実を知る関係者がなぜこうも怒るのか？日共が総力を上げ、自己の影響下の文化人を総動員し、三〇〇人もの弁護士団を組織して真相を隠し、ウソとデマで人民大衆を騙し欺いた「白鳥裁判」は敗北に終わった。いま事件の真相を知る事件参加者が、日共の既に敗北して投げ捨てたウソとデマの破れ旗を拾って私を攻撃するのは何故か？このような彼らの攻撃は、事件の真相を公表しようとする私の決意を更に強固にする

だけでしかない。

また、それまでは真相を公表することについて消極的だった妻の栄子が、この高安君に対する一文を機に「断固公表すべき！」に転じたのである。

だがしかし、同じく一九七五年十二月に中国から帰国した事件関係者の斎藤和夫氏は、事件の真相を公表することに踏み切った私を支持してくれた。その上でさらに自己の事件に関係した詳細な事実を初めて私と斎藤孝氏に話してくれた。事件関係者では最高齢で、帰国後は個人的に不幸の多かった彼が私を力強く支持してくれたのである。私は中国で二〇年の年月を過ごし苦労した斎藤和夫氏の支持に本当に勇気付けられた。彼には心から感謝している。

## 一一・なぜ真実を覆い隠そうとするのか

私はなぜ事件関係者の中に、白鳥事件の真相の公表に対しこのような二つの相反する態度と考えが起きるのかを考えた。

一九九七年十二月に北京を訪れ鶴田倫也君に会おうとしてみなわなかった。この時に中共中聯部の古い友人に会って事件の真相公表に話が及んだ際、彼は「まだ鶴田がいる。事件は生きている」といった。また私が『流されて蜀の国へ』を出版した直後に桂川君が「まだ彼がいる。事件は生きている」と言ったと聞かされた。さらに思えば鶴田君が私への手紙の中で「事件の真相を明らかにする時期は、例えば関係者の全てが死亡した後二〇年後か、又は事件発生の一〇〇年目とかが考えられます」と述べている。

門脇君、鶴田君、桂川君、そして中聯部の古い友人らのこれらの言

説から垣間見えてくるのは、嘘とでっち上げの「白鳥裁判運動」を發動し、多くの善良な日本人民を騙して巻き込んだ日本共産党の立場と全く同質であり、その本質は組織を守るため、自らの利益を守るためには人民の根本的な利益に反することともいえない思想態度である。

私自身もこのことについては、つい最近まで彼らと同じ立場にあった。私は中国に送られてからは、事件関係者がいかに帰国できるかを自己の任務と考えて生きてきた。そのためには文革時代の屈辱にも耐え抜いた。特に自分の帰国が実現してから後は、事件関係者の全員が帰国することを自分の終生の仕事と考えてきた。だから帰国後の大林、門脇両君と日共左派閥東派の排斥や侮辱にも耐えてきた。そして事件の真相の公表は最後の一人、鶴田倫也君の帰国後と考えてきた。従って九七年に鶴田君の帰国が本人の決意で実現した暁には、真相の公表を実現できると考えていた。かくのごとく私の考えは事件関係者の帰国、つまり小グループの利益に真相の公表を従属させていたと言わざるを得ない。日本人民の利益を考える立場に立てなかったのである。

いま私が事件の真相公表に踏み切り、日本人民の前に自己の誤りを自己批判することは遅きに逸したと非難されるかもしれない。しかし事件発生から五〇周年にあたり私は今、日共のデマ攻撃で苦しめられてきた高安知彦君、日共の不当な圧力で病に侵され今も入院している村手宏光君、真実を述べて日共によって社会的に葬り去られた佐藤直道氏等を想わざるを得ない。

日共のデマと偽りに歪曲された歴史は多くの人を騙し欺いてきたし、そして多くの人々を苦しめてきた。今事件の真相を知る者がその真相を公表することは、日本の人民に対して、また歴史に対する責任であると思う。

## 一二・ 故村上国治氏を偲ぶ

クニさん（この節では村上国治氏をこう呼ぶことを許していただきたい。国治氏を語る時、私にはこの呼び方が最もびつたりくるのである）は私の入党紹介者である。知り合ってから既に五六年の歳月が過ぎ、彼が亡くなってからもすでに一〇年の時が過ぎた。今、私の頭の中にはクニさんと共に活動した日々が走馬灯の如く浮かび上がってくる。

彼が初めて上土別村の私の家を訪ねてきたのは一九四七年七月の末であった。土別の駅から二〇キロも離れた天塩川上流の私の家に訪れた共産党員はクニさんが初めてであった。

この時私は現金稼ぎで日雇いの土場巻きに出ていて家にはいなかった。彼は私の家に着くなり、鎌を持って田の畦草を刈り、馬草を準備してくれたのである。夕刻、私が馬をひいて戻ると彼は直ぐに馬草を馬に与えてくれた。その時私は直感的に、彼は「百姓だ！仲間だ！」と思った。その夜は二人で語り明かし、お盆の後に比布に彼を尋ね入党することを約束した。

私は八月一七日に比布のクニさんの家を訪ねた。クニさんのお母さんが温かく迎えてくれた。その足で旭川の日本共産党旭川地区委員会に行き、入党申込書を書いた。推薦人はクニさんともう一人は桐山さんだったと記憶している。

私は入党し新しい人生を踏み出した。この時クニさんから学んだのは、農民に接する時は必ず農民の苦しみ、農民の立場に立つことが活動の基本であるということだった。これは私が日本で農民工作する時の活動原則となつたのはもちろんだが、中国に渡ってから農村工作をする

時の原則であった。この原則は農民に対してだけでなく、全ての大衆に対する活動原則である。これはクニさんが初めて私を訪ねてくれた時に、彼自身の行動で教えてくれたことであつた。

私は一九四九年の暮に新しくできた日本共産党名寄地区委員会の委員長となり、農業をやめて党の常任活動家として名寄に出てきた。

名寄に来て間もなく、下川町の党シンパと朝鮮人の人たちから、地区委員会に党の政策演説会開催の要請があつた。私には政策演説会をやる自信などない。そこで党上川委員会に助けを求めたところ、上川委員会はクニさんを派遣してくれた。

この演説会は夜に開催されるため、シンパの人たちが夕食と宿、帰りの汽車賃を出してくれる約束で私達二人は下川町に行つた。演説会でクニさんは、選挙で党の議員が三五名当選したことから話し始め、議会で多数の議席を獲得し平和的に権力奪取を目指すという、当時の党の平和革命路線に沿つた話をした。クニさんの話が終わると、朝鮮総連の人たちから「レットパージで首切れられ、職場放棄で労働者が逮捕され、団体規制法で朝鮮総連が何の理由なく解散させられている。このように敵権力の弾圧が強まっている時に、議会で多数をとつて革命が成功するのか？」等の質問が続出した。クニさんはあくまで党の平和革命論を唱え続けた。最後には聴衆と喧嘩状態になつてしまい、この演説会は深夜の一二時になつてようやく解散した。

平和革命論に怒つた招待者からは約束の食事と宿の提供もなく、もちろん交通費も出してもらえなかつた。仕方なく下川から名寄までの二〇キロを、零下一五度の寒さに震えながら鉄道線路の上を二人して歩いて帰つた。空腹に耐え切れず線路下のキャベツの葉を拾つてかじりながら歩き続け、夜明け頃に名寄の地区委員会の事務所にたどり着いた。ク

ニさんは党の平和革命路線を堅持したが、それから半月も経たずにコミンフォルムは野坂の平和革命論を批判したのである。これを機に党は平和革命路線から武装闘争路線へと急転回していくのである。

一九五一年一〇月から十一月にかけて、クニさんは党の留萌委員会から、私は上川委員会から札幌に出てきた。クニさんは党札幌委員会のビューロキャップになり、私は党北海道地方委員会の軍事部の仕事に就いた。この時期は日本共産党の五一年新綱領の軍事方針に基づき、武装闘争の展開と武装組織の建設が党の当面する緊急の任務であつた。私は札幌委員会の闘争を中心に全道の各委員会の武装闘争と武装組織の状況を調査していた。札幌では「赤ランプ闘争」「朝鮮人の奪還闘争」「餅代よこせの闘争」等から「白鳥事件」まで連続して軍事闘争を展開した。

これらの闘争の中で北大の学生黨員を基礎に武装組織を建設し、武器の収集、製造が進められていたのである。私の知る限り、全道の党で武装闘争の実践では札幌が抜きん出ていた。クニさんは無条件で全力をあげて党の極左の方針を実践したのである。

白鳥事件発生後、日本共産党は党外に向けては「白鳥事件」は反動的な国家権力のデッチ上げと挑発であり、党は事件と一切関係ないという方針を宣伝した。しかし党内では極少数の範囲で事件の事後処理と対策をたて、吉田四郎氏がクニさんを批判・罵倒して秘密裏に事件による混乱を収めようとした。クニさんはこの誤つた党の方針に従い、自分が逮捕されてからも「村上無罪の裁判闘争」の方針を堅持して闘い続けた。そしてクニさんは敵権力と闘う英雄と讃えられた。しかしこの「白鳥裁判運動」も、最高裁への再審請求が却下されて敗北に終わった。その後、共産党は白鳥事件も村上無罪を勝ち取る裁判も完全に投げ捨ててしまつたのである。クニさんは国民救援会の副会長になつたが、党内では邪魔



者扱いされ、冷や飯を食わされるようになった。クニさんの晩年は決して幸福とはいえないものだったようである。

野坂の平和革命路線の時も、五一新綱領による極左の武装闘争の時期も、また「白鳥裁判運動」の闘いでも、クニさんはいついかなる時も党の方針を忠実過ぎるほど忠実に実行する、まさに「理想的な」共産党員だったといえる。

中国から帰った翌年の一九七四年二月二六日、私は東京の武道館で開催された「農民春闘二・二六中央集会」で偶然にクニさんに出会った。私が階段を昇り武道館の入り口が見える所に立つと、入り口からクニさんが出てくるのが見えた。私は遠目にもクニさんだと判った。お互いの顔がはつきり判別できるところまで歩み寄った時に、私は「村上さん！俺は川口だ。しばらくだなあ」と声をかけたが、彼は「どなたでしょうか」などとぼけている。「私は上土別の川口だ。あんたは私の入党推薦人でないか。忘れたのか」と迫ると、彼もやつと思いついたように「やあやあ」となった。だが彼は「時間が無い」の一点張りで、「用があれば国民救援会に来てくれ」と言い残して逃げるようにして私の側から去っていった。この時のクニさんには私が知っている昔の覇気や迫力が感じられず、私はなんとも言えない寂しさを感じたものだった。

クニさんが六九年に出獄した後、クニさんの希望で大田嘉四夫氏の仲介により太田氏の自宅でクニさんと高安君が会ったことを最近になって高安君本人から聞かされた。旧交を温めあった二時間あまりの雑談の中で、どちらからも事件については全く話題にのぼらなかったという。公判廷の中では激しく高安君を責めておきながら、出獄した後何事もなかったように「裏切り者」であるはずの高安君に自ら進んで会いにいったクニさん。この件についてはいろいろな見方があると思うが、私には

ここにクニさんの激しい闘士の顔の裏に秘められた、血の通った人間の顔を覗き見る思いがする。そして農民の苦しみを知り、農民の立場に立ち、他人の農家であつても着いたら田や畑に入り共に働いた、あの暖かいクニさんの人間性を思い出す。高安君に会いにいったクニさんはやはり昔のクニさんである。党の方針が正しい時も誤った時も、がむしやりに闘うクニさんの内に秘められた、暖かさ、優しさを見出し、私は何か救われた思いがする。

クニさんの霊に合掌。

### 一三・愚かな八〇年の人生を省みて

二〇世紀を終えて二二世紀に入り、私も八〇才の老人になった。今その人生を振り返ってみた。普通の農村の青年として育ち、海軍に入り、一九四五年八月の敗戦により香港で英国の捕虜となり、英軍の捕虜収容所に入れられ、その年の一月に復員した。

私はその捕虜収容所で始めて「帝国主義戦争」、「天皇制の反人民的本質」、「社会主義、共産主義」、「人民の為の共産党」などについて話を聞いて感心していた。私は二四歳の秋であつた。それ以後漠然と「共産主義」に憧れを持ち、日本共産党に入り、その党によって中国に送られ、帰国し、党组织から離れたが「共産主義」を捨てず自分自身は懸命に生きてきた。

そして私が「共産主義」として信じ理想としてきたのは毛沢東の人民公社の政策と組織を核にした「共産主義」であつた。

中国の民主主義革命は孫中山の提出した民族、民生、民権の三民主義である。孫中山は「中国国民党第一回全国代表大会」で三民主義に對

して新しい解釈を示し、「連ソ、連共、労働援助の三大政策を発表した。」これが新三民主義であり、中国共産党の新民主主義革命綱領の基礎ともなった。中国の民主革命は帝国主義、官僚資本主義、地主階級を打倒し、土地を農民に与え、都市の小ブルジョアジー、民族ブルジョアジーを統一した革命であり、その本質は共産党の指導する農民革命であった。その経済的綱領は私有制を基礎に個人経営の農民、都市手工業者、都市の民族資本家を主体にする市場経済、資本主義経済を發展させる綱領であった。政治的綱領は民主を發揚し、封建的思想との闘争を徹底し民主主義の制度を確立することであった。

新中国の建国後、農村の土地革命が成功し、農民は土地所有者となり、農業生産は急速に發展し、都市の手工業も資本主義工業も急速に發展し、商業も繁栄してきた。經濟發展の遅れた農業大國の中國では新民主主義の市場經濟を發展させる事が正しく、生産力を發展させることこそが実際に合っていた。一九四九年の新中国の建国後は新民主主義の社會を強固にし、發展させるべきであった。（文革後、人民公社を解散し、改革開放政策での市場經濟、資本主義のメカニズムによる急速な經濟の發展は実践的に証明している）

毛沢東は一九五二年一二月に過渡期の總路線の「宣傳要綱」の中で「中華人民共和國の成立は中國革命の第一段階の終結、第二段階の開始を示している。第二段階即ち社會主義社會の建設、都市と農村の資本主義成分の完全消滅である。」と云い、『毛沢東の早年與晩年』二二三ページ）私有制の消滅と公有制を基礎とした社會主義の建設段階を提唱した。又この時期に、劉少奇、周恩來などの主張した「新民主社會の秩序を確立する」と言う正しい意見を右翼日和見主義として批判した。

この後、一九五三年から農業の集團化、都市手工業の集團化、資本

主義商工業の公私公營化に由る公有制を確立した。この中國の社會主義化は中國の實情に合わず、人民の要求に合わず、党内と人民の不滿を呼び起こした。毛沢東は更に人民の不滿と民主の要求を反右派闘争で彈圧し、大躍進と人民公社建設の運動を展開し、共產主義への直接的移行を提起したのであった。この極左の方針は社會を混亂に導き餓死者も生まれる慘状をもたらした。

これに気づき極左の是正の為に一九五九年七月末から、八月にかけて中共中央委員會が芦山で開かれた。これが歴史的に有名な芦山會議である。この會議で彭德懷が極左を是正する正しい意見を手紙に書いて毛沢東に出したが、毛沢東はこれを右翼日和見主義として批判し、吊るし上げ、彭德懷、張聞天、黃克誠、周小舟の四人を反黨の「軍事クラブ」とデッチ上げ、彼ら四人を党中央内のブルジョア分子集團として処分した。引き続き全國で反右翼日和見主義の闘争を展開し、全國で、人民の苦しみを理解し、正しい意見を持った三百数十万人余りの黨員と幹部が批判され抑圧された。

一九五七年一〇月に毛沢東は中共八回大會で決定した中國社會の主要な矛盾を独断で変更した。「プロレタリア階級とブルジョア階級との矛盾、社會主義の道と資本主義の道との矛盾、これは疑いもなく、当面のわが國社會の主要な矛盾である。」（『毛沢東選集第五卷』七三五ページ）この様に階級闘争を勝手に主要な矛盾に決め、階級闘争を要とし、「反右派闘争」に続けて「版右翼日和見主義の闘争」、「四清運動」から「文化大革命」へと突き進み、國家主席の劉少奇を始め党内の幹部を「資本主義の道を歩む実権派」として打倒し、劉少奇は反革命の汚名を着せられたまま命を落とした。後継人に決めた林彪はクーデターを起し、モンゴル平原で墜落死した。最後に毛沢東は逝去し、「四人組」が逮捕され

文革は終わりを告げた。中国の人民は「第二の解放」と歓呼して喜んだ。私は文革の中で毛沢東の誤りに気づき始め、文革の終了、更に中共中央の「建国以来の党の若干の歴史的問題についての決議」が出て、毛沢東の誤りは明らかになった。しかし、私の思想の中では毛沢東の誤りの本質がすっかり明らかになったわけではなく、私は日中友好の活動に参加したり、また一方では中国少数民族の文学に興味をもち、少数民族の文学の研究、翻訳と出版に取り組んで日をおくっていた。

一九九七年に入り、李鋭先生の著作、『芦山会議実録』を読んで深い感銘を受け、早速妻の栄子と二人で翻訳を始め、一月には初訳を終えた。中国の問題に新しい認識が生まれた。同年一月に北京で作者の李鋭先生に始めてお会いし、私たち二人は『芦山会議実録』の初訳の日本語の原稿を作者の李鋭先生に贈った。その時に李鋭先生との二回の懇談を通じて私たち二人は過去知らなかった中共党史の事実とその分析を聞かされた。全く「目から鱗が落ちた」という感じであった。また先生は私たちの幼稚な疑問にも懇切丁寧に答えて下さった。そして別れにさいしては先生から著作『毛沢東晚年“左”的錯誤思想初探』を贈られた。

この先生の著作を頂いて帰国し、一度目を通すと忽ち引き付けられ一気呵成に読み終えた。私と栄子は直に翻訳に取り掛かり、二ヶ月で初訳を終えて、一九九八年三月に再び北京に李鋭先生を訪ねて、初訳の原稿を贈り、疑問点をお聞きし、理解を更に一步深めることができた。

この時から私は中国問題、特に毛沢東の晩年の誤りを基本的に理解でき思想的に明るくなり、思想が落ち着いた。そして李鋭先生のその他の多くの著作を学んだ。また李鋭先生の紹介で、七四年に逝去された顧准先生の遺作、『顧准文集』をも学んで自分の認識を高め明らかにする為に努力した。

二〇世紀が終わり二二世紀に入り、私も八〇才となり、八〇年の人生を総括する事を考えた。一九四五年の秋に香港の捕虜収容所で「社会主義」を知ってから五五年の間それを理想として生きてきた。しかし、二〇世紀の終わりになって社会主義陣営は崩壊し、全ての元社会主義国はみな市場経済に復帰し、資本主義のメカニズムによって経済をそれぞれに発展させている。これは現実である。では私の追及した理想、社会主義即ち共産主義は何だったのか？

そこで五〇年ぶりにマルクスの『共産党宣言』を開き、繰り返し読み考えた。そこで解つたことはマルクスが述べている共産主義の一節が再認識された。マルクスは「階級と階級対立の存在するブルジョアジーの古い社会は、このような一つの連合体に替わる、そこでは各個人の自由な発展が全ての人に対しての自由な発展の条件である。」抽象的ではあるが、これ以外の共産主義はありえないであろう。

更にマルクスは宣言の中で「ブルジョアジーは生産手段のみならず、ついでに生産関係、更に全部の社会関係を不断に革命化する。そうでなければ生存してゆけない」と言っている。現代の資本主義は矛盾を激化させ、危機を深めている。だが、未だ命脈も尽きず、崩壊した以前の「社会主義国陣営」をも巻き込んで、全世界的に発展している。『共産党宣言』の中のこの提起は過去に何回も学んだが私は記憶に留めた事はなかった。今度冷静になり、現在の世界資本主義の実際と結びつけて考えると非常に正確な資本主義の存在の法則を示している。私は「共産主義」を目指して資本主義を倒す為に戦ってきた。この闘いの実践を経て、再びマルクスを学び資本主義は未だ存在し、発展していることを認識することができた。

二〇世紀の終わりにやっと少しはマルクスの共産主義が理解されて

来た感じである。では今まで六〇年近くも理想としてきた私の共産主義は何だったのか？レーニンの「計画＋電化」も、スターリンの提起もあるが、私がつとも身近にして信じたのは毛沢東の提起した「共産主義」その具体的な中味は「人民公社」と「五・七指示」である。

毛沢東は人民公社に関して「農、林、牧、副、漁の全面的発展と労働者、農民、商人、学生、兵士が相互に結合した人民公社を建設し、農民を指導して社会主義建設を加速し、社会主義建設の完成を早め、また次第に共産主義に移行するために必ず採用する基本方針である。」「みた所、共産主義がわが国で実現するのは既に遙遠の将来の事ではなくなつた、我々は必ず積極的に人民公社の形式を運用し、共産主義に移行する具体的な道を模索すべきだ。」「中国共産党執政四十年（二五二ページ）

毛沢東は一九六六年五月七日に有名な『五・七指示』を発表した。その中で軍隊、農民、労働者、学生、商業と服務業に公務員などの各業種の問題を提起している。『五・七指示』の内容は人民公社の内容を更に発展させたものである。

以上の毛沢東の人民公社による共産主義への道は文化大革命の終結と共に消え去つた。中国社会の発展法則に背き、中国人民を苦しめた毛沢東の「共産主義の理想」は消え去つた。歴史的に見ると毛沢東の「共産主義の理想」には深い思想的根源がある。

【毛沢東は若き学生の時に康有為の『大同書』を学び、又日本の武者小路実篤の新しい村のイデオロギーを学び影響を受けた。毛沢東が一九一九年に書いた『学生工作』の一文の中の「新村」考えは「若干の新家庭を合わせ、即ち一種の新社会を創造できる。」「新社会」の中には公共の育児院、蒙養院（幼稚園）、学校、図書館、劇場、病院、公園、博物館、自治会などがある。「工作の事項」の規定は、「種園、種田、種林、

蓄牧、種桑、鶏魚」等がある。『湖南教育月刊』第一卷第二号（一九一九年二月）これは何と後の人民公社の「農、林、牧、副、漁」に似ていることか。

更に毛沢東は一九五八年十二月に『人民公社に関する若干の問題の決議』が通過した時、毛沢東は将に『張魯伝』に自ら注を付け、参加者に印刷し配布した。彼は漢の末に張魯が行った所の「五斗米道」の中の「置義舍」（家賃を免除した住宅）、「置義米肉」（食事に銭が要らない）、「役人を置かず、皆で治める政治を行う」、「各部の大衆が、多くの者が祭りを取める」、「（政と社を合一し、労働と武装の結合に近い）、などの作法も又鑑賞された。」

（一）の中は『毛沢東の早年興晩年』二四五―二四六ページを参照）

「一九五八年一〇月二八日に河南省范県は三年で共産主義に移行する企画をした。共産主義積極分子大会で県委員会の書記は共産主義の生活状況について話した。「人々は新樂園に入り、飲み食いには銭が要らず、鶏鴨魚肉の味は新鮮で、毎食四皿の采を食べ、日々果物が食べれて、各様の衣服は着終わらない。人々は皆天国を素晴らしいと言うが、天国は新樂園に及ばない」。これに毛沢東は注解を付け、「これは非常に意義がある、一首の詩だ、出来そうだ、時間を余り急いでいる。只の三年、それも構わない、三年で無理なら、延ばしても好いだらう。」と肯定し誓めた。『中国共産党執政四十年』（一五七ページ）

以上、見て来たように人民公社とそれを中心にした一連の観点は中国社会の現実の発展法則に違反しているし、その内容と観点は農民の急進主義、平均主義の思想であり、農民のユートピアである。従って中国人民の不満を招き、党内外の幹部の反対を招いた。毛沢東はその正当な意見をブルジョアジーの攻撃と思い、これに打撃を与える階級闘争とし



て戦いをはじめた。最後は文革で国家主席の劉少奇を「党内の資本主義を歩む最大の実権派」として打倒し、死に至らしめた。同時に中国人民を最大の苦しみに陥れた。

偉大な革命家、中国人民を指導し、解放した偉大な指導者も権力を持ち、謙虚さを失い、観念的な「究極の目的（共產主義の理想）」を持つと人民と対立する。権力を持つと人は変わる。絶対権力を持つと絶対に変わる。モンテスキューは『法の精神』の中で云っている。「専制政体は恐怖を原理とする」、「専制政体の原理は、その本姓からして腐敗しているから、たえず腐敗する。」そしてまた「その残虐性はそのまま残る」と。『モンテスキュー』（中央公論新書四二一、四三〇頁）権力は腐敗する。絶対権力は絶対腐敗する。専制は恐怖と残虐性をもって腐敗する。

また顧准先生が亡くなる一年前、一九七三年にスターリンについて述べた言葉は毛沢東にも言えるのではないか。「革命家自身は最初には全て民主主義者であった。しかし、もし革命家が一つの究極の目的を樹立し、その上心底からこの究極の目的を信じたならば、彼はこの究極の目的を達成する為に惜しみなく民主を犠牲にし、専制を実行する。スターリンは残虐だ、だが、彼の残虐は、決して一〇〇パーセントが彼個人の権力の為だけではない。それはこの権力が大衆の福利、究極の目的の為に信じてやむなくかくの如く行つたのだ。内心は善の為に実際は悪行を行う、これは悲しむべきだ」（顧准『民主興究極目的』顧准文集、三七五ページ）。この顧准の言葉はそっくりそのまま毛沢東にも当てはまる。

私は最近必要があつて毛沢東選集の一から四巻に目を通じた。偉大な中国の新民主革命を指導し、中国人民を解放した正確な理論、観点に心から納得したし、毛沢東は中国革命の偉大な指導者である。しかし、

毛沢東選集の五巻に入ると社会主義を急ぎ、新民主主義社会の秩序の確立に反対する時期から問題が見えてくる。特に反右派闘争、大躍進と人民公社運動、四清運動から文化大革命へと根本的な誤りへと発展して行き、最後の大破綻へと行き着くのである。私は反右派から文革の半ばまで中国の社会で生活し、大衆の中で自ら苦しみを体験した。その間毛沢東を信じ、彼の「共產主義」信じていた。今人生の八〇年を迎え、二一世紀を向かえて遅まきながら私の信じていた共產主義が小ブルジョア農民のユートピアの空想である事に気付くことができた。私自身が農民であり、仲間の農民の解放を願つて革命運動に参加したが、小ブルジョアジーの立場と視野の狭さが容易に毛沢東の平銀主義、農民のユートピアを受け入れたのであつた。私の八〇年の人生は空想を追い求める愚かな人生と言わざるを得ない。だが懸命にこの長い闘いを経てやっとマルクスの共產主義に近づくことができた。実に実践を経てこそ正しい認識に近づくことが出来る。資本主義の打倒を目的にした闘争の実践は資本主義が未だ存在し、発展している事が改めて認識された。

私はすで老いて、若者のように活動は出来ない。しかし、まだやるべきことも残っている。未だに解決していない白鳥事件の真相を明らかにしようと考えている。五十年に渉り、自己の思想の弱さ、人民に対して責任を負う勇気の無さによつて未だ実現することが出来なかった、白鳥事件の真相を明らかにしたいと考える。その事で私は人生八〇年の終わりの仕事に成るかもしれないが、やり遂げたいと思つてゐる。

#### 一四・鶴田倫也君へ

鶴田君と初めて会つたのは一九五〇年の秋であつた。あれから既に

五三年の年月が過ぎた。色々のことがあり、多くの年月が流れ去った。私の今の願いは唯一つ、祖国日本で君と再会することです。君が今故郷に戻るに際して、それを阻む要因は何もないはずです。ただ君が決心することだけではないでしょうか。そして私が一番心配しているのは君の健康のことです。私も八十二歳になり、先はそう長くはないでしょう。でも君が帰国するまでは生き延びるつもりです。君がいま一つ心を決めて故郷へ帰り、再び会える日を心から待っています。今こそ歴史の真実を語り「封印を解く時」ではないでしょうか。

## 一五・最後の「一言」

二〇〇一年九月一八日に私の妻、栄子が帰らぬ人となった。享年七八才であった。

栄子が新しい旅立ちの数日前の夜に、一言「心残りが一つある。斎藤さんの本が八月には出なかった。」と言が残した。それは斎藤孝氏が執筆し、「白鳥事件」の真相を公表する本である。妻は何の理由もなく異国に送られ、一八年もの長き年月を強制的に中国に滞在させられ、悲しく辛い想いをし、苦しめられた。その原因である「白鳥事件」の真相の公表を、妻は人生の最後まで待ち望んでいた。私は六〇年間の永い年月の苦労の旅を共にしてきた栄子の最後の願いを実現させる事こそ、私に残された最後の仕事と考えている。この仕事を終えて、次の旅路もまた栄子と伴に歩くことを心から願っている。

二〇〇三年二月